片山遺跡発掘調査報告書

令和３（2021）年３月

加古川市教育委員会

写真１　遺跡上空から三木市方面を望む（南西から）

写真２　遺跡上空から城山を望む（南東から）

巻頭図版２

写真３　調査区１全景（写真下が南東）

写真４　掘立柱建物（SB）１・２（南西から）

写真５　掘立柱建物（SB）３・４（南から）

写真６　掘立柱建物（SB）５（東から）

写真７　調査区２全景（写真下が北東）

写真８　調査区２－１（第１面）全景（南東から）

写真９　竪穴建物（SI）２（北西から）

写真 10　掘立柱建物（SB）７（北から）

写真 11　調査区２－１（第２面）全景（南東から）

写真 12　周溝墓（SZ）１（南東から）

写真 13　周溝墓（SZ）2（北西から）

写真 14　周溝墓（SZ）3（東から）

巻頭図版 8

写真 15　木棺墓（ST）２検出状況（東から）

写真 16　木棺墓（ST）２出土遺物

序　文

加古川市は、市域のほぼ中央を南北に貫流する一級河川「加古川」の恵みを受けて発展してきた都市です。現代を生きる私たちの生活はますます便利になりつつあり、より快適な生活を送ることができるように変化しています。ただ、そのいっぽうで、私たちの身の回りには、水や緑など、昔と変わらない豊かな自然が広がっていることに気がつきます。かつては、今以上に豊かな自然が広がっていたということは想像に難くなく、私たちの祖先もこのような自然のなかで生活を送ってきたことと思われます。その足跡は地中にも多く残されており、発掘調査を行うと、埋蔵文化財という形でその確かな軌跡が姿を現します。

本書で報告する片山遺跡は、雁戸井地区ほ場整備事業に伴って新たに発見された遺跡で、このたびの発掘調査によっておもに弥生時代、平安時代から中世にかけて営まれた集落跡であることがわかりました。このように市内の各所にはまだその存在が知られていない遺跡が数多く眠っています。

本書が、郷土の歴史や文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となるとともに、先人たちの営みに思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。

末筆ではございますが、日頃より文化財保護行政に多大なるご理解とご協力を賜っている市民の皆様をはじめ、多くのご教示を賜っている関係機関、各位に厚くお礼申しあげます。

令和３年３月

加古川市教育委員会

教育長　小南克己

例　言

・本書は、兵庫県加古川市八幡町下村地内に所在する片山遺跡の発掘調査報告書である。
・発掘調査は、兵庫県北播磨県民局が事業実施主体となって進めている「雁戸井地区ほ場整備事業」に伴うものとして、平成 29・30 年度に実施した。
・雁戸井地区ほ場整備事業のうち埋蔵文化財の調査は、加古川市教育委員会が主体となって実施した。
・各年度の調査期間は、以下のとおりである。
　平成 29 年度：平成 30（2018）年１月 10 日から２月 28 日まで
　平成 30 年度：平成 30（2018）年９月８日から 12 月 28 日まで
・整理作業及び報告書の作成は、平成 30 年４月１日に開始し、令和３（2021）年３月 19 日の本書の刊行をもって終了した。
・本調査は、加古川市教育委員会が実施し、株式会社島田組、株式会社文化財サービスの協力を得た。
・発掘調査から報告書刊行に至るまで（平成 29 年度から令和２年度まで）の調査体制は、以下のとおりである。

加古川市教育委員会

教育長	田渕博之（平成 30 年度まで）、小南克己（令和元年度から）
教育指導部	
部　長	大西隆博（平成 29・30 年度）、山本照久（令和元年度から）
調整担当部長	井部浩司（平成 29 年度）
次　長	平田喜昭（平成 30 年度）、杉本達之（令和元年度から）
文化財調査研究センター	
所　長	沼田好博（平成 29 年度から）
副所長	宮本佳典
庶務担当係長	安田啓一郎（平成 29・30 年度）、吉岡和誠（令和元年度）、藤本庸介（令和２年度から）
主　査	藤原典子（令和元年度まで）、髙下寛（令和元年度から）、九鬼一文（令和２年度から）
学芸員	山中リュウ、浅井達也（令和元年度まで）、平尾英希（**調査補助**）、古林舞香（**調査補助**、令和２年度から）
埋蔵文化財専門員	西岡巧次（**調査担当**、平成 29・30 年度）、岡田美穂（**調査補助**、令和元年度から）

・遺構図のトレースは、株式会社文化財サービスが実施した。
・遺物の水洗・注記・接合・復元は、加古川市臨時職員の井上かおり、窪田美佳、佐藤薫、前川博子が実施した。
・遺物の実測は、西岡のほか、古林、岡田、加古川市臨時職員の園原悠斗（当時立命館大学大学院）が行い、実測図のトレースは株式会社文化財サービスが実施した。
・挿図の作成は、加古川市臨時職員の西村秀子と株式会社文化財サービスが実施した。
・遺物観察表の作成は、古林が行った。

・本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅲ章を平尾が、第Ⅱ章を西岡が行い、編集は平尾が担当した。
・本書にかかる出土遺物、図面及び写真は、加古川市教育委員会が保管している。
・発掘調査から報告書の作成に至るまでに、下記の関係機関ならびに個人の方々にご指導、ご協力を賜った。記して感謝を申しあげます（五十音順、敬称略）。

池田征弘　岡田章一　岡本篤志　岡本一士　垣内拓郎　久保弘幸　上月昭信　上月香澄
鈴木貴久美　田路　守　田中幸夫　友久伸子　永惠陽子　西森忠幸　松岡千寿　萬代和明
森内秀造　山本祐作
大手前大学史学研究所　加古川市文化財審議委員会　雁戸井土地改良区　兵庫県教育委員会

凡　例

・本書における標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。また、遺構配置図中の座標値は、世界測地系（第Ⅴ系）に基づき、現場での作図段階で設定したものである。
・本書掲載の遺構番号は、整理作業時に改めて付したものであり、遺構種別ごとに通し番号を付した。なお、竪穴建物と掘立柱建物のピットについては、各遺構のなかでさらに通し番号を付している。
・本書掲載の遺物実測図は、出土遺構にかかわらず通し番号を付している。また、須恵器の断面は黒塗り、陶磁器の断面はグレートーン、そのほかの遺物の断面は白抜きで表現している。
・遺物観察表の計測値で用いている「＊」は復元値、「＞」は残存値を示す。
・土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局及び財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2015 年版）に準じた。

目　次

巻頭図版
序文
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　１．遺跡の位置 …… 1
　２．調査にいたる経緯と経過 …… 1
　３．地理的・歴史的環境 …… 5

第Ⅱ章　調査の成果 …… 13
　１．調査区１ …… 13
　２．調査区２ …… 23

第Ⅲ章　総括 …… 43

図版
抄録

挿　図　目　次

図１　遺跡の位置 …… 2
図２　ほ場整備事業予定範囲 …… 3
図３　調査区配置図 …… 4
図４　遺跡周辺地形図 …… 6
図５　周辺遺跡分布図 …… 8
図６　調査区１遺構配置図 …… 14
図７　調査区１土層断面図 …… 15
図８　掘立柱建物（SB）１ …… 17
図９　掘立柱建物（SB）１出土遺物 …… 18
図10　掘立柱建物（SB）２ …… 19
図11　掘立柱建物（SB）３ …… 20
図12　掘立柱建物（SB）４ …… 20
図13　掘立柱建物（SB）５ …… 21
図14　ピット（SP）１ …… 22
図15　ピット（SP）２ …… 22
図16　ピット（SP）１出土遺物 …… 22
図17　ピット（SP）２出土遺物 …… 22
図18　調査区１包含層等出土遺物 …… 22
図19　調査区２遺構配置図 …… 24
図20　調査区２土層断面図 …… 25
図21　竪穴建物（SI）１ …… 27
図22　竪穴建物（SI）２ …… 28
図23　掘立柱建物（SB）６ …… 30
図24　掘立柱建物（SB）７ …… 31
図25　周溝墓（SZ）１ …… 32
図26　周溝墓（SZ）１出土遺物 …… 32
図27　周溝墓（SZ）２ …… 33
図28　周溝墓（SZ）３ …… 34
図29　木棺墓（ST）１ …… 35
図30　木棺墓（ST）２ …… 35
図31　木棺墓（ST）２出土遺物 …… 35
図32　木棺墓（ST）３ …… 36
図33　木棺墓（ST）４ …… 36
図34　木棺墓（ST）５ …… 37
図35　木棺墓（ST）６ …… 38
図36　木棺墓（ST）７ …… 39
図37　木棺墓（ST）８ …… 39
図38　木棺墓（ST）９ …… 40
図39　調査区２包含層等出土遺物 …… 40
図40　遺構配置図（弥生時代中期後半） …… 44
図41　遺構配置図（弥生時代後期後半） …… 44
図42　遺構配置図（平安時代後期～鎌倉時代） …… 45

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧 …… 9
表２　遺物観察表 …… 41

図　版　目　次

写真１　遺遺跡上空から三木市方面を望む（南西から）……巻頭図版１
写真２　遺跡上空から城山を望む（南東から）……巻頭図版１
写真３　調査区１全景（写真下が南東）……巻頭図版２
写真４　掘立柱建物（SB）１・２（南西から）……巻頭図版２
写真５　掘立柱建物（SB）３・４（南から）……巻頭図版３
写真６　掘立柱建物（SB）５（東から）……巻頭図版３
写真７　調査区２全景（写真下が北東）……巻頭図版４
写真８　調査区２－１（第１面）全景（南東から）……巻頭図版４
写真９　竪穴建物（SI）２（北西から）……巻頭図版５
写真10　掘立柱建物（SB）７（北から）……巻頭図版５
写真11　調査区２－１（第２面）全景（南東から）……巻頭図版６
写真12　周溝墓（SZ）１（南東から）……巻頭図版６
写真13　周溝墓（SZ）２（北西から）……巻頭図版７
写真14　周溝墓（SZ）３（東から）……巻頭図版７
写真15　木棺墓（ST）２検出状況（東から）……巻頭図版８
写真16　木棺墓（ST）２出土遺物……巻頭図版８
写真17　調査区１全景（北東から）……図版１
写真18　SB １（北東から）……図版１
写真19　SB ２（南東から）……図版２
写真20　SB １（SP ２）土層断面（南西から）……図版２
写真21　SB ２（SP ５）土層断面（北から）……図版２
写真22　SB ３・４（南から）……図版２
写真23　SB ５（東から）……図版３
写真24　SB ５（SP ３）土層断面（北西から）……図版３
写真25　SB ５（SP ４）土層断面（北から）……図版３
写真26　SP １土層断面（南西から）……図版３
写真27　調査区１土層断面（北東から）……図版３
写真28　調査区２－１（第１面）全景（北東から）……図版４
写真29　SI １（北から）……図版４
写真30　SI １土層断面（南西から）……図版５
写真31　SI １南西側周壁溝土層断面（北西から）……図版５
写真32　SI ２検出状況（東から）……図版５
写真33　SI ２土層断面（西から）……図版５
写真34　SI ２北西側周壁溝土層断面（南から）……図版５
写真35　SI ２南西側周壁溝土層断面（北から）……図版５
写真36　SI ２（SP ３）土層断面（北東から）……図版５
写真37　SI ２（下が南西）……図版５
写真38　SB ６①（南から）……図版６
写真39　SB ６②（南東から）……図版６
写真40　SB ６（SP ８）土層断面（西から）……図版６
写真41　SB ７（北から）……図版６
写真42　SB ７（SP １）土層断面（北から）……図版６
写真43　SZ １検出状況（南東から）……図版７
写真44　SZ １周溝（b-b´）土層断面（南東から）……図版７
写真45　SZ １（南東から）……図版７
写真46　SZ ２周溝（b-b´）土層断面（南から）……図版７
写真47　SZ ２周溝（d-d´）土層断面（北西から）……図版７
写真48　SZ ２（北西から）……図版７
写真49　SZ ３（東から）……図版８
写真50　ST １（北東から）……図版８
写真51　ST １土層断面（北西から）……図版８
写真52　ST ２検出状況（西から）……図版８
写真53　ST ２弥生土器出土状況（北から）……図版８
写真54　ST ２・３（北西から）……図版９
写真55　ST ２土層断面（北から）……図版９
写真56　ST ３土層断面（東から）……図版９
写真57　ST ４（西から）……図版９
写真58　ST ４土層断面（北東から）……図版９
写真59　ST ５（南西から）……図版９
写真60　ST ５墓壙土層断面（南西から）……図版９
写真61　ST ６（北から）……図版 10
写真62　ST ６土層断面（西から）……図版 10
写真63　ST ７検出状況（北から）……図版 10
写真64　ST ７（南東から）……図版 10
写真65　SZ ３、ST ８・９（写真下が南東）……図版 10
写真66　ST ８（東から）……図版 10
写真67　ST ９土層断面（東から）……図版 10
写真68　調査区２ - １土層断面（北東から）……図版 10
写真69　調査区１出土遺物（遺物 No. １～ 10）……図版 11
写真70　調査区２出土遺物（遺物 No.11 ～ 19）……図版 12

第Ⅰ章　調査の概要

１．遺跡の位置

片山遺跡は、加古川市八幡町下村に所在する（図１）。

加古川市は、播磨灘に面した兵庫県南部のほぼ中央に位置し、西側を高砂市・姫路市、北側を加西市・小野市、東側を三木市・加古郡稲美町・同郡播磨町・明石市と接する。市域のほぼ中央には県下最大の河川である加古川が南北に貫流し、市域を大きく二分しているものの、現在では国道２号線や国道 250 号線（明姫幹線）、ＪＲ山陽本線などの主要基幹交通路が東西に横断するなど、東播磨地域の中核的都市として機能している。

片山遺跡が所在する八幡町下村は、加古川左岸の市域東部に位置する。いわゆる「いなみの台地」のほぼ西端に位置し、その中央部を加古川支流の草谷川が西流している。市域のなかでも農地として利用されている土地が多く、田園風景がよく残った地域であるものの、近年の東播磨南北道路の建設などによって旧来の景観が変化しつつある。

２．調査にいたる経緯と経過

（１）調査にいたる経緯

既刊の『上村池遺跡発掘調査報告書Ⅰ』で述べている上村池遺跡の発掘調査の経緯と同様（山中編 2020）、片山遺跡の発掘調査は「雁戸井地区ほ場整備事業」に伴って実施した。

平成 25（2013）年５月、加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は、加古川市農林水産課から八幡町上西条・下村の段丘上に広がる農地のほ場整備事業計画について説明を受け、その土地利用などに関わる協議依頼を受けた。事業の対象範囲は 56.4ha と大規模なもので、市教委は、文化財保護法（以下「法」という。）第 94 条第１項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地が計画地内に複数存在していることを伝え、工事着手前に法に基づく通知を市教委経由で兵庫県教育委員会（以下「県教委」という。）へ提出する必要がある旨の回答を行った。さらに、埋蔵文化財包蔵地外においても埋蔵文化財の有無を確認するための分布調査や試掘・確認調査を実施し、埋蔵文化財の適切な把握と保護に努めることへの協力を依頼した。

その後、直接の事業実施主体である兵庫県北播磨県民局加古川流域土地改良事務所（以下「北播磨県民局」という。）や、地元の土地所有者などで構成される加古川市雁戸井土地改良区などの関係機関を含めた協議と調整を経て、平成 26 年度に具体的に事業の対象となった土地 44.5ha に対して分布調査を行った（図２）。分布調査は、田植え前の平成 26（2014）年４月から５月にかけてと、稲刈り後の平成 27（2015）年１月から２月にかけての計２回実施し、計画地内における遺物の散布状況を調査した。

この分布調査の成果を受け、平成 27・28 年度には、遺物が多く散布していた場所を中心に計 272 か所の調査区を設定して試掘･確認調査を実施した。平成 27 年度は､平成 27 年 12 月から平成 28(2016) 年２月にかけて上西条の「第１工区」と下村の「第３工区」の一部に設定した 112 か所の調査区について、平成 28 年度は、平成 29（2017）年１月から２月にかけて上西条の「第２工区」と下村の「第３工区」の一部に設定した 160 か所の調査区について試掘・確認調査を行った。このうち、第３工区内には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在していなかったものの、調査の結果、同工区内に設定した複数の調査区から遺構・遺物が確認された。また、市教委の試掘・確認調査と並行して、平成 28 年度には県教委によって東播磨南北道路改築事業に伴う試掘調査が第３工区内の隣接地で実施され、遺構・

130°E
135°
140°
145°
45°
35°
30°N
25°N
125°E
130°
兵庫県
0
400 km
日本海
但 馬
丹 波
播 磨
摂 津
加古川市
播磨灘
大阪湾
淡 路
加 古 川 市
加 古 川
片山遺跡
稲 美 町
0
S=1/50000
2 km

図１　遺跡の位置

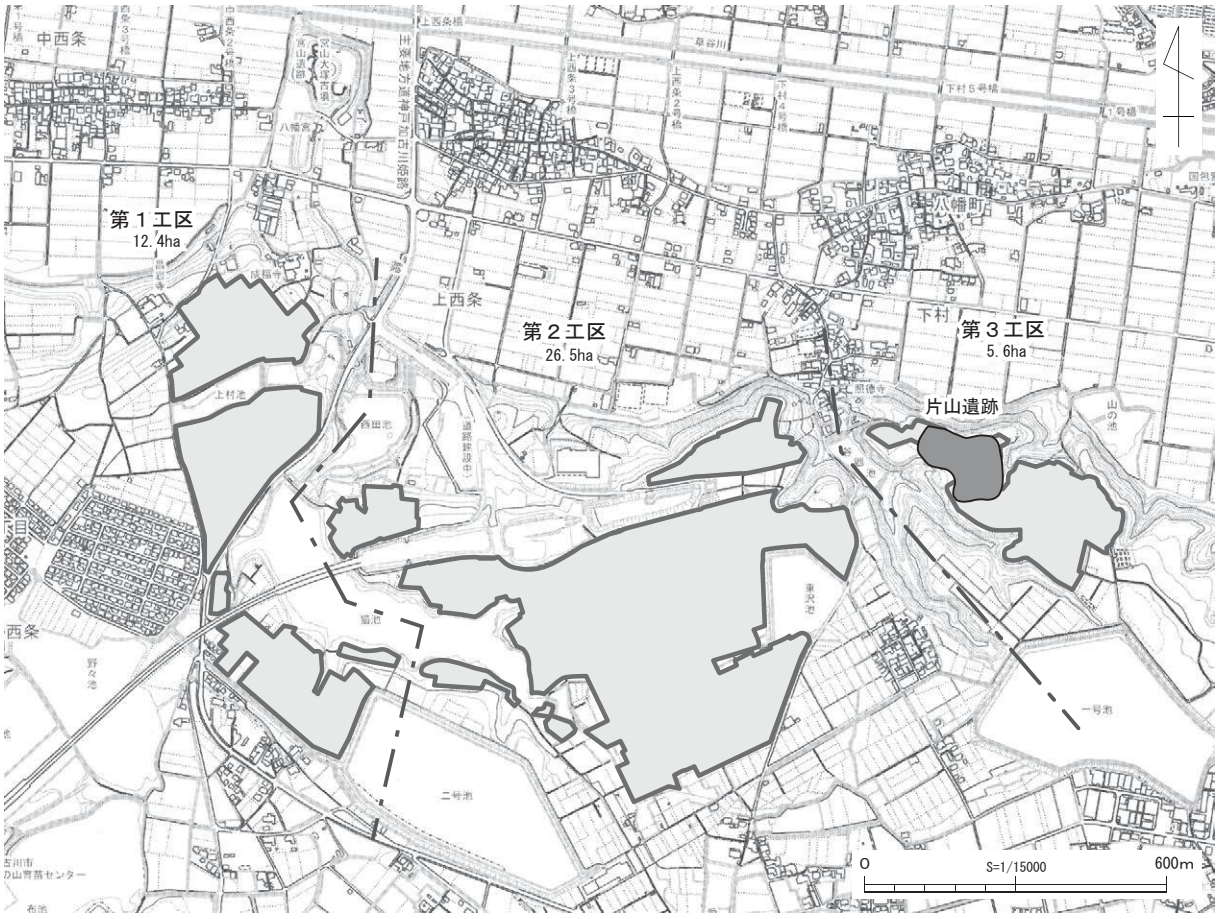


図２　ほ場整備事業予定範囲

遺物が確認された旨の報告があった。その後、これらの成果を基にして、平成 29 年 4 月に周知の埋蔵文化財包蔵地の変更（全域発見）について県教委へ報告し、弥生時代及び奈良時代から中世にかけての集落跡として「片山遺跡」が決定された。

こうした経緯を経て、平成 29 年 8 月 1 日付けで北播磨県民局から片山遺跡の発掘通知が市教委へ提出され、同年 10 月 18 日付けで県教委から発掘調査を実施する必要がある旨の通知があった。この勧告を受け、市教委は北播磨県民局と協議を重ね、大部分は盛土保護などによって遺跡を地中に保存することとし、水路工事などで破壊される部分について発掘調査を実施することになった。

当初、片山遺跡の発掘調査は、平成 29 年度にすべての調査範囲について実施する予定であったが、調査期間中における農作物の栽培などとの兼ね合いで、平成 29 年度と平成 30 年度の 2 か年に分けて実施することになった。平成 29 年度は、平成 30（2018）年 1 月 10 日から 2 月 28 日にかけて 230㎡を、平成 30 年度は、同年 9 月 8 日から 12 月 28 日にかけて 356㎡を調査した。なお、平成 29 年度の調査では、想定される遺構の広がりから調査区の一部を拡張して調査を実施した。

また、同じく平成 29・30 年度には、市教委が発掘調査を行った隣接地において、東播磨南北道路改築事業に伴う片山遺跡の発掘調査が公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターによって実施されている。

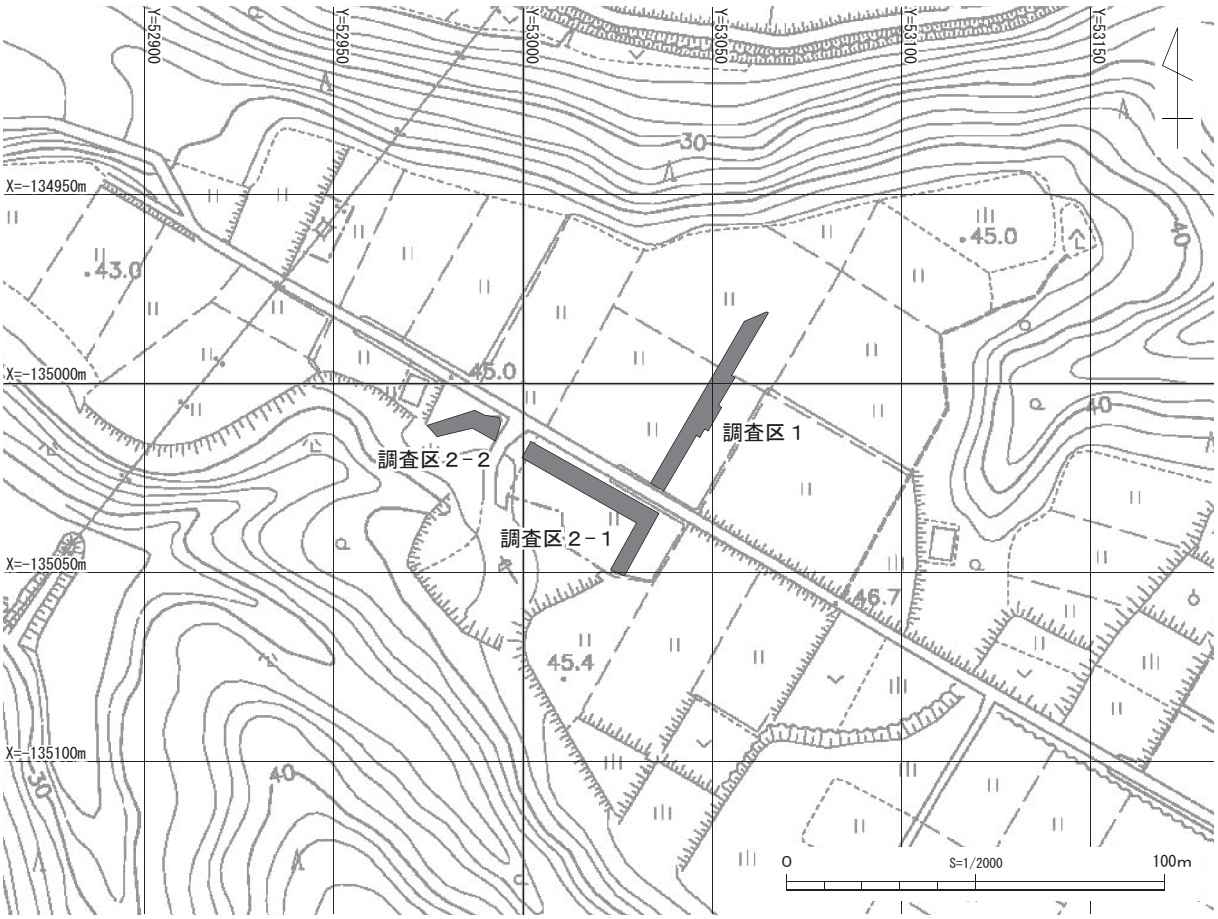


図３　調査区配置図

（２）調査経過

〔平成 29（2017）年度〕

1 月 10 日： 調査区（調査区１）設定後、バックホーによる耕作土掘削開始。
1 月 11 日： 機械掘削と併行して人力による遺構検出作業開始。
1 月 23 日： 遺構検出作業と併行して遺構略測図作成。
1 月 25 日： 各遺構の精査開始。適宜、写真撮影と断面図作成。
1 月 31 日： 遺構検出状況の全景写真撮影。
2 月 2 日： 各遺構の精査と併行して平面図作成。
2 月 9 日： 調査区全景写真の空撮を実施。
2 月 17 日： 調査区全景写真とともに、各掘立柱建物の個別写真を撮影。
2 月 19 日： 各掘立柱建物の断ち割りを実施。
2 月 22 日： 調査区北西壁の下層確認を実施。
2 月 26 日： 下層確認に伴う追加の断面図作成と併行して埋め戻し開始。
2 月 28 日： 埋め戻し完了をもって現地での調査終了。

〔平成 30（2018）年度〕

9 月 8 日： 調査区（調査区２−１）設定後、バックホーによる耕作土掘削開始。
9 月 19 日： 機械掘削終了後、人力による遺構検出作業開始。

10月 4 日： 遺構検出作業と併行して遺構略測図作成。
10月 5 日： 遺構検出状況の全景写真撮影。
10月12日： 遺構検出状況の全景写真撮影（２回目）。
10月15日： 各遺構の精査開始。適宜、写真撮影と断面図、平面図作成。
11月10日： 現地説明会開催。
11月20日： 調査区全景写真の空撮を実施。
11月27日： 調査区２−１の各作業と併行して調査区２−２の調査に着手。調査区設定後、バックホーによる耕作土掘削開始。
12月 5 日： 調査区２−２の人力による遺構検出作業開始。
12月10日： 調査区２−１の遺構完掘状況の全景写真撮影と空撮を実施。調査区２−２の遺構検出状況の全景写真撮影。
12月11日： 調査区２−１の木棺墓などの断ち割りを実施。調査区２−２の各遺構の精査開始。適宜、写真撮影と断面図、平面図作成。
12月17日： 調査区２−１南西壁の下層確認を実施。下層確認に伴う追加の断面図作成。
12月19日： 調査区２−２の遺構完掘状況の全景写真撮影。
12月28日： 埋め戻し完了をもって現地での調査終了。

３．地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

加古川市の地形的特徴として、市域のほぼ中央を南北に貫流する加古川によって、その下流域に大規模な沖積平野が形成されていることが挙げられる。その一方で、加古川右岸の市域北西部にはおもに流紋岩質溶結凝灰岩からなる山地・丘陵が分布し、同左岸は六甲山地の隆起運動によって形成された隆起扇状地となっており、市域の北東部を中心に神戸市西区の雌岡山を頂点として南西方向に形成された「いなみの台地」が広がっている。なお、左岸域のいなみの台地は、草谷川、曇川及び加古川によって囲まれた範囲に形成された河成段丘の「加古台地」と、曇川以南に列状に形成された海成段丘の「日岡台地」に区分されている（田中 1989）。

このように大別される加古川市の地形のなかで、片山遺跡は加古川左岸の加古台地上の北端部に位置する（図４）。北側低地部との比高差は約 25 mを測り、台地縁辺部には顕著な段丘崖が形成されている。また、遺跡周辺の地形を細かくみると、遺跡の西側には南東から北西に向かって谷筋が通っており、片山遺跡は北西方向に舌状に張り出した台地のほぼ先端に位置している。

（２）歴史的環境

近年、片山遺跡の周辺では、開発に伴う発掘調査が継続的に実施されており、周辺の遺跡の内容が徐々に明らかになりつつある。ここでは、おもに片山遺跡（図５－１、以下括弧内の番号は図５と表１に対応）を中心とした八幡町所在の周辺遺跡について取り上げ、おおよそ中世までを対象とした各時代の歴史的様相を概観する。なお、片山遺跡では、市教委の調査とほぼ併行して県教委による発掘調査も実施されているため、以下ではこの県教委の調査成果も記述する[註1]。

旧石器時代・縄文時代　現在、片山遺跡の周辺において旧石器時代と縄文時代の遺跡はほとんど知られていない。旧石器時代の遺跡についてはこれまでに遺跡台帳に登録されたものはないが、平成 29

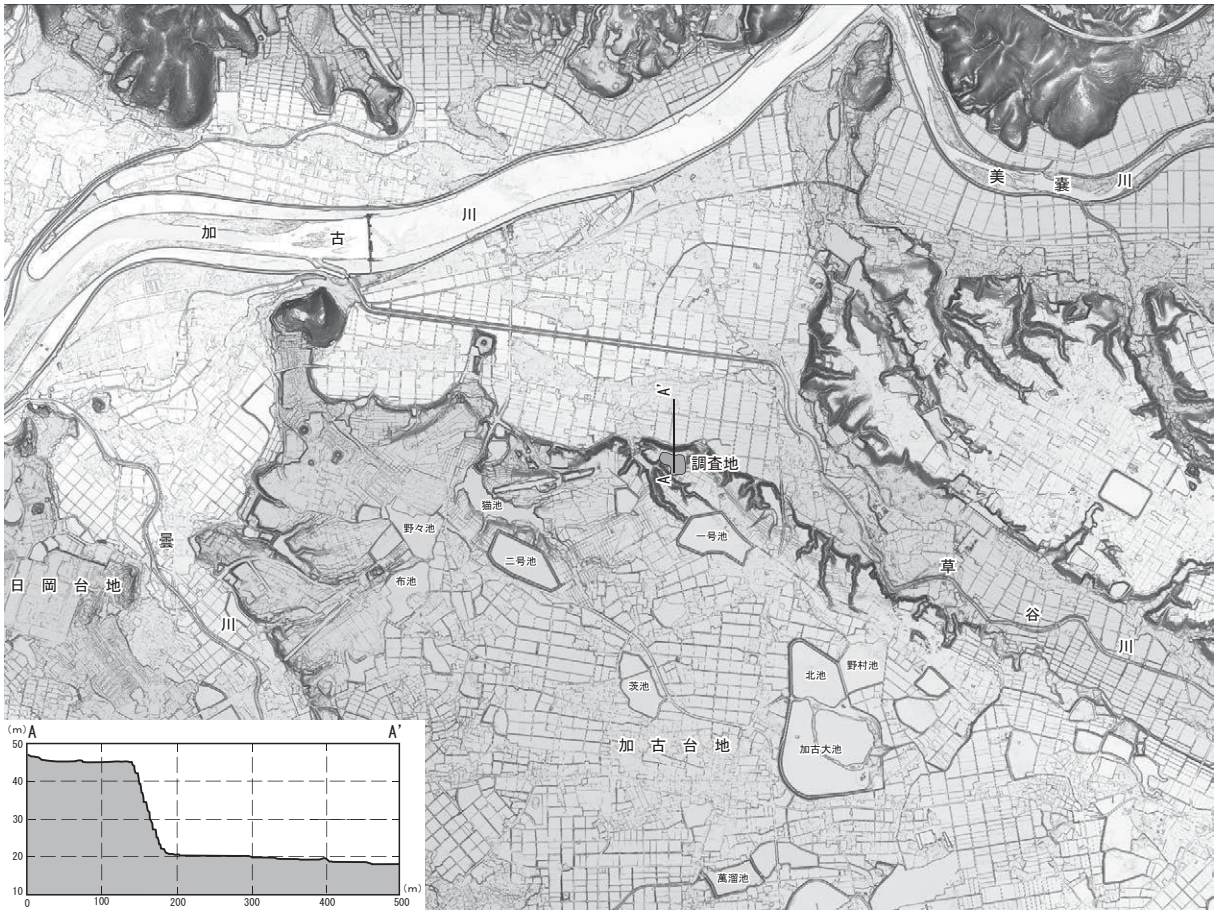


図４　遺跡周辺地形図

（大手前大学史学研究所提供：[兵庫県 _ 全域数値地形図 _ ポータル（2010 年度～ 2018 年度）]［兵庫県］を一部改変）

年度に実施された県教委の発掘調査によって片山遺跡から後期旧石器時代のナイフ形石器が出土し（（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部（以下「まち技」という。）2018）、周辺域での人間活動の開始がこれまでよりも遡ることが確かめられた。縄文時代の遺跡についてもほとんど確認されていないが、宮山遺跡（24）で縄文時代後期の平面円形プランの竪穴建物や集石遺構などが検出されている（太田 1996a）。しかし、正式報告がなされていないため、詳細は不明である。

弥生時代　弥生時代になると、特に加古川の最下流域において遺跡数が急増する。ただ、片山遺跡の周辺でそのような顕著な増加は認められず、遺跡の形成が認められるのはおもに弥生時代中期以降のことである。

弥生時代前期の遺跡はほとんどないものの、猫池遺跡（56）において前期から中期にかけての弥生土器が採集されており（山本 1975）、前期の集落遺跡が周辺に存在している可能性が考えられる。

弥生時代中期に属する遺跡についても現状ではあまり知られていないが、片山遺跡において溝や土坑が検出されているほか（まち技 2018）、集落跡と考えられる下村遺跡（23）で当該期の弥生土器が出土している（置田ほか 1989）。また、片山遺跡とは西側の谷筋を挟んで同じ加古台地に立地する望塚（58）では、扁平鈕式の六区袈裟襷文銅鐸が出土しており（直良 1927a・1927b、難波ほか 2015 など）、加古川市唯一の銅鐸出土例として注目される。このように、中期以降になると、片山遺跡の周辺域において遺跡が形成され始める。

弥生時代後期の遺跡には、まず集落跡として、片山遺跡で後期末から古墳時代初頭の竪穴建物３棟が調査されている（まち技 2019）。また、宗佐遺跡（16）では、同時期の竪穴建物 13 棟などが確認されている（垣内 2019 など）。さらに、後述する東沢１号墳（51）周辺でも後期末の竪穴建物１棟などが確認されており（山田 2012）、後期後半以降に集落跡の増加が認められる。上記以外の遺跡としては、播磨堂遺跡（38）において後期の壺棺墓もしくは甕棺墓[註2]が（真野 1972、加古川市教育委員会文化財調査研究センター 2010）、大日山遺跡（61）において後期後半の壺棺墓が確認されている（太田 1996b）。

古墳時代　古墳時代には、各時期を通して特徴的な古墳が市内各所に築造されている。その一方で、集落跡についての調査事例はほとんどなく、その動態はほとんど把握できていない。

片山遺跡の周辺で古墳時代前期に遡る古墳には、長慶寺山１号墳（２）と愛宕山古墳（三 26）がある。ただ、長慶寺山１号墳は加古川右岸に、愛宕山古墳は草谷川右岸の南北方向に延びる丘陵の尾根を挟んだ美嚢川左岸に立地しており、地形的には異なった場所に築造されている古墳である。長慶寺山１号墳は全長約 35 ｍの前方後円墳で、竪穴式石槨とみられる埋葬施設から内行花文鏡や各種鉄製武器・農工具が出土しており（西谷・太田 1996）、前期前半頃の築造とみられる。愛宕山古墳は前期後葉頃に築造された全長約 91 ｍの前方後円墳で、奈良県佐紀陵山古墳と墳丘形態の類似性が指摘されており（岸本 2005）、その築造背景を含めて注目される古墳である。

古墳時代中期の古墳には、東沢１号墳などがある。東沢１号墳は、一辺約 19.5 ｍの造り出し付方墳で、壺形埴輪や家形埴輪とともに初期須恵器や韓式土器、瓦質土器などが出土しており（山田 2012）、渡来人との関わりが推測される特徴的な古墳である。このほか、当該期に築造された可能性が考えられる古墳として、宮山大塚古墳（25）と成福寺古墳群（32 ～ 35）がある。宮山大塚古墳は、加古台地が加古川に向かって舌状に突出した台地突端部に築造された全長 40 ｍ以上の帆立貝形古墳とみられ、その築造時期として中期後半が想定されている（加古川市教育委員会 1995、山本 1995）。成福寺古墳群は４基以上の古墳から構成されていたとみられるが、現状では円墳２基、方墳２基が残っているのみである。このうち、２号墳が調査されており、埋葬施設に竪穴式石槨をもつ一辺約 10 ｍの方墳であることが確認され、当該期に築造された古墳の可能性が指摘されている（山本 1996）。しかし、正式な報告がなされていないため詳細は不明である。

古墳時代後期になると、市内各所で群集墳が築造されるようになり、片山遺跡の周辺でも東沢古墳群[註3]（52 ～ 55）や天王山古墳群（43 ～ 47）、宮山古墳群[註4]（26 ～ 31）などの古墳群が存在する。東沢古墳群では、東沢２・３号墳において発掘調査が行われており、このうち２号墳は横穴式石室を埋葬施設にもつ後期後半の古墳であることが明らかとなっている（西口 2011）。天王山古墳群は、現在のところ５基の古墳が確認されており、いずれも横穴式石室を埋葬施設にもつ円墳で、終末期に形成された古墳群であることが判明している（渡辺編 2011）。宮山古墳群の様相もこれらの古墳群と類似し、６基の古墳はいずれも埋葬施設に横穴式石室をもった円墳で、その築造時期は後期後半と考えられている（加古川市教育委員会 1995）。このほか、東沢１号墳の周辺において当該期の土器棺の可能性がある須恵器甕が確認されている（山田 2012）。

なお、古墳時代後期から終末期にかけての片山遺跡の周辺には古墳以外の遺跡も存在し、東沢中遺跡（57）で終末期の掘立柱建物５棟が検出されているほか（西口 2011）、野村１号窯（63）や野新村１号窯（69）などで須恵器生産が行われていたことが確認されている（上月 2004、上月ほか 2010）。

加古川市
加古川
上荘町見土呂
上荘町都染
加古川大堰
八幡町船町
八幡町中西条
八幡町上西条
八幡町下村
八幡町野村
片山遺跡
加古川学園
八幡神社
一号池
二号池
大沢
北新田
中新田
加古
千和池
上新田
七軒屋
稲美町
加古大池
北池
野村池
青之池
池の内
五軒屋
八軒屋
北山
0
S=1/25000
1 km

図５　周辺遺跡分布図

表１　周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代
1	片山遺跡	旧石器・弥生・奈良～中世
2	長慶寺山１号墳	古墳
3	長慶寺山２号墳	古墳
4	長慶寺山３号墳	古墳
5	長慶寺山４号墳	古墳
6	長慶寺山５号墳	古墳
7	長慶寺山６号墳	古墳
8	長慶寺山７号墳	古墳
9	井ノ口古墓	中世
10	井ノ口遺跡	奈良
11	井ノ口城跡	中世
12	井ノ口１号墳	古墳
13	井ノ口２号墳	古墳
14	国包構居跡	中世
15	宗佐構居跡	中世
16	宗佐遺跡	弥生～中世
17	宗佐南遺跡	中世
18	野村１号墳	古墳
19	野村２号墳	古墳
20	野村３号墳	古墳
21	野村構居跡	中世
22	野村遺跡	弥生
23	下村遺跡	弥生～平安
24	宮山遺跡	縄文～平安
25	宮山大塚古墳	古墳
26	宮山１号墳	古墳
27	宮山２号墳	古墳
28	宮山３号墳	古墳
29	宮山４号墳	古墳
30	宮山５号墳	古墳
31	宮山６号墳	古墳
32	成福寺１号墳	古墳
33	成福寺２号墳	古墳
34	成福寺３号墳	古墳
35	成福寺４号墳	古墳
36	古堂廃寺	奈良
37	上村池遺跡	奈良
38	播磨堂遺跡	弥生
39	池ノ尻古墳	古墳
40	西田池１号墳	古墳
41	西田池２号墳	古墳
42	西田池３号墳	古墳
43	天王山１号墳	古墳
44	天王山２号墳	古墳
45	天王山３号墳	古墳
46	天王山４号墳	古墳
47	天王山５号墳	古墳
48	天王山１号窯	中世
49	天王山２号窯	中世
50	西田池南遺跡	奈良～平安
51	東沢１号墳	古墳
52	東沢２号墳	古墳
53	東沢３号墳	古墳
54	東沢４号墳	古墳
55	東沢５号墳	古墳
56	猫池遺跡	弥生
57	東沢中遺跡	弥生～古墳
58	望塚（盆塚）	弥生

遺跡番号	遺跡名	時代
59	皿辻遺跡	中世
60	前谷遺跡	奈良～平安
61	大日山遺跡	弥生
62	下村古墳	古墳
63	野村古窯跡１号窯	奈良
64	野村古窯跡２号窯	奈良
65	野村古窯跡３号窯	奈良
66	野村古窯跡４号窯	奈良
67	野新村１号墳	古墳
68	野新村古墳	古墳
69	野新村古窯跡１号窯	古墳
70	野新村古窯跡２号窯	古墳
71	野新村古窯跡３号窯	古墳
三１	正法寺１号墳	古墳
三２	正法寺１－ａ号墳	古墳
三３	正法寺１－ｂ号墳	古墳
三４	正法寺２号墳	古墳
三５	正法寺３号墳	古墳
三６	正法寺４号墳	古墳
三７	正法寺５号墳	古墳
三８	正法寺６号墳	古墳
三９	正法寺７号墳	古墳
三10	正法寺８号墳	古墳
三11	正法寺10号墳	古墳
三12	正法寺11号墳	古墳
三13	正法寺12号墳	古墳
三14	正法寺13号墳	古墳
三15	正法寺14号墳	古墳
三16	正法寺15号墳	古墳
三17	正法寺16号墳	古墳
三18	正法寺17号墳	古墳
三19	下石野高田散布地	弥生・平安
三20	下石野西角散布地	中世
三21	下石野上畑遺跡	奈良～平安
三22	下石野１号墳	古墳
三23	下石野２号墳	古墳
三24	下石野３号墳	古墳
三25	下石野４号墳	古墳
三26	下石野５号墳（愛宕山古墳）	古墳
三27	下石野和田ノ上散布地	奈良～平安
三28	下石野坂芝遺跡	奈良
三29	石野田中散布地	奈良
三30	石野氏館跡	鎌倉
三31	王子山１号墳	古墳
三32	王子山２号墳	古墳
三33	王子山３号墳	古墳
三34	王子山４号墳	古墳
三35	王子山５号墳	古墳
三36	王子山６号墳	古墳
三37	王子山７号墳	古墳
三38	王子山８号墳	古墳
三39	王子山９号墳	古墳
三40	王子山10号墳	古墳
三41	王子山11号墳	古墳
三42	王子山12号墳	古墳
三43	王子山13号墳	古墳
三44	王子山14号墳	古墳
三45	王子神社経塚	平安～鎌倉

＊三１～45は三木市内の遺跡

奈良時代・平安時代　奈良時代初頭に編纂された『播磨国風土記』によると（秋本 1993）、「賀古郡条」には４つの里が記されており、片山遺跡が所在する八幡町は「賀古郡望理里」の範囲に含まれていたと考えられる。近年、この周辺では開発に伴う発掘調査が継続的に実施されており、奈良時代・平安時代の様相が明らかになりつつある。

集落跡としては、上村池遺跡（37）や宗佐遺跡、片山遺跡などで当該期のものが確認されている。上村池遺跡では、古墳時代終末期に集落の形成が始まり、奈良時代に最盛期を迎え、その後一旦途絶えた後、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて再び集落が営まれた様子が明らかになり（山中 2020）、なかでも奈良時代の大型掘立柱建物の存在が注目される。宗佐遺跡では、奈良時代から平安時代初頭、平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物が多数確認されているほか、後者の時代の木棺墓や鍛冶遺構などが検出されている（まち技 2018・2019 a・2019b）。一方、片山遺跡では、上記２遺跡のように複数の時期の遺構は確認されていないが、県教委の調査において平安時代後期から鎌倉時代初頭頃の掘立柱建物が複数棟検出されており、また土坑からまとまった状態で出土した土師器や須恵器のなかには墨書土器も確認されている（まち技 2019b）。このように、遺跡によって集落が営まれた時期に若干の違いが認められるものの、奈良時代から平安時代にかけての片山遺跡の周辺では集落が断続的に営まれていた状況が窺える。

このほか、天王山窯跡群（48・49）では、小規模ながらも平安時代末から鎌倉時代にかけて須恵器と瓦の生産を行っていたことが確認されており、また既述の天王山古墳群においては、平安時代後期から鎌倉時代に横穴式石室の再利用があったと考えられている（渡辺編 2011）。

中世以降　片山遺跡の周辺で中世以降における遺跡の発掘調査はあまり行われていないが、前述した宗佐遺跡では、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物のほか、中世以降の水田跡、戦国時代に埋没したとみられる谷川などが確認されている（まち技 2018・2019 a・2019b）。また、上村池遺跡では、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物が複数棟検出されているほか、龍泉窯系青磁椀などが副葬された鎌倉時代初頭の木棺墓が検出されている（山中 2020）。片山遺跡では、掘立柱建物などの居住施設は確認されていないものの、県教委の調査において中世から近世にかけての溝や土坑が調査されている（まち技 2018）。

このほか、片山遺跡周辺には、国包構居跡（14）や宗佐構居跡（15）、野村構居跡（21）といった城館跡があるが、いずれも考古学的に検証されておらず、その詳細は不明である。

このように、現状では中世以降における様相は判然としないものの、徐々にではあるが中世以降の遺跡の内容が明らかになりつつある。

註１：現在のところ、県教委による片山遺跡の調査成果については、発掘調査報告書が刊行されていないため詳細は不明であり、その大部分を兵庫県立考古博物館発行の『埋蔵文化財調査年報』に依った。そのため、正式な報告書の掲載内容と相違する可能性があることに留意いただきたい。

註２：（真野 1972）の文献に掲載されている遺跡一覧表では「壺棺」とされている一方で、（加古川市教育委員会 2010）の文献では「甕棺墓」とされているが、いずれにせよ、具体的な資料が知られていないため詳細は不明である。

註３：現在のところ、５基の古墳が確認されている古墳群であるが、前述の東沢１号墳を除いた２～５号墳が後期及び終末期古墳と考えられる。

註４：古墳群としては計７基の古墳で構成されているが、前述の宮山大塚古墳を除いた宮山１～６号墳の６基の古墳が後期古墳である。

参考文献

秋本吉郎校注　1993『風土記』日本古典文学大系新装版　岩波書店

太田三喜　1996a「(18) 宮山遺跡」『加古川市史』第四巻　兵庫県加古川市

太田三喜　1996b「(27) 大日山遺跡」『加古川市史』第四巻　兵庫県加古川市

置田雅昭・西谷眞治　1989「第２章先史・原史時代」『加古川市史』第一巻　兵庫県加古川市

垣内拓郎　2019「加古川市宗佐遺跡・片山遺跡の調査」『近畿弥生の会第 22 回集会奈良場所（夏場所）資料集』近畿弥生の会

加古川市教育委員会　1995『加古川市文化財図録』加古川市文化財調査報告 14　加古川市教育委員会

加古川市教育委員会　2010『加古川市遺跡地図第３版』加古川市文化財調査報告 22　加古川市教育委員会

岸本直文　2005「三木市愛宕山古墳の測量調査」『前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究』2001 － 2004 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書　大阪市立大学大学院文学研究科

（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　2018『平成 29 年度埋蔵文化財調査年報』兵庫県立考古博物館

（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　2019a『現地説明会資料宗佐遺跡（Ｅ地区）発掘調査の成果』（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　2019b『平成 30 年度埋蔵文化財調査年報』兵庫県立考古博物館

上月昭信　2004『播磨地方における６世紀・７世紀の須恵器生産』上月昭信

上月昭信・西川英樹　2010『野新村１号窯発掘調査報告書』加古川市文化財調査報告 23　加古川市教育委員会文化財調査研究センター

田中眞吾　1989「第１章加古川市付近の地形と地質」『加古川市史』第一巻　兵庫県加古川市

直良信夫　1927a「播磨国加古郡八幡村望塚における銅鐸出土の状態について」『歴史地理』第 49 巻第１号　日本歴史地理学会

直良信夫　1927b「再び望塚の銅鐸出土の状態について」『歴史地理』第 49 巻第４号　日本歴史地理学会

難波洋三・高妻洋成・篠宮　正　2015「兵庫県加古川市望塚出土銅鐸の研究」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第８号　兵庫県立考古博物館

西口圭介　2011『東沢古墳群・東沢中遺跡』兵庫県文化財調査報告第 389 冊　兵庫県教育委員会

西谷眞治・太田三喜　1996「(59) 長慶寺山古墳群」『加古川市史』第四巻　兵庫県加古川市

真野　修　1972『上西条遺跡加古川市国包電話局建設用地埋蔵文化財確認調査概報』

山田清朝　2012『東沢１号墳』兵庫県文化財調査報告第 431 冊　兵庫県教育委員会

山中リュウ　2020『上村池遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告 32　加古川市教育委員会

山本三郎　1975「加古川市八幡町・猫池遺跡採集遺物」『兵庫考古』第１号　兵庫考古研究会

山本祐作　1995「兵庫県加古川下流域の後期古墳の動向」『西谷眞治先生古稀記念論文集』西谷眞治先生の古稀をお祝いする会

山本祐作　1996「(46) 成福寺古墳群」『加古川市史』第四巻　兵庫県加古川市

渡辺　昇編　2011『天王山古墳群・天王山窯跡群』兵庫県文化財調査報告第 402 冊　兵庫県教育委員会

第Ⅱ章　調査の成果

第Ⅰ章でも述べたとおり、ほ場整備事業に伴う片山遺跡の発掘調査は、平成 29 年度と平成 30 年度の２か年に分けて実施したため、ここでは便宜的に各年度に実施した調査区ごとにその成果を述べ、第Ⅲ章において両調査区の成果をまとめて記述することにする。

１．調査区１

（１）検出遺構の概要と基本層序（図６・７）

調査時点において、調査区１周辺は、田畑として利用されている農地であった。地表面は、標高約 45.0 ｍを測り、基盤をつくる地山までの深さは、調査区北部で地表下約 35cm、調査区中央部で地表下約 30cm、調査区南部で地表下約 50cm を測る。

この地山と耕作土直下に薄く堆積する床土の間には、調査区北部で 15cm 前後、調査区中央部で５cm 前後の遺物包含層（第４層）が堆積し、その上面は北部の掘立柱建物３・４（SB ３・４）の検出面となっている。中央部の掘立柱建物１・２（SB １・２）については元々の検出面が明確ではないが、上層から掘り込まれた他の小型のピットが掘立柱建物１・２の大型の柱掘方を切って掘り込まれていることから、小型の柱掘方で構成される掘立柱建物３・４の構築時期より古く建てられたとみられ、下層の地山（第６層）から掘り込まれていた可能性が高いと考えられる。

一方、南部では、床土直下の遺物包含層（第４層）が 20cm 前後の厚さで南に向かって緩やかに下降して堆積し、さらにその下層に磨滅した弥生時代後期頃の土器を含む別の遺物包含層（第５層）が基盤をつくる地山（第６層）の上に堆積している。南部の掘立柱建物５（SB ５）は、北部の掘立柱建物３・４と同様に、遺物包含層（第４層）の上面から掘りこまれている。

このように、調査区１における検出遺構は、微量の土師器や須恵器の小片を含む遺物包含層（第４層）上面から掘り込まれた小型の柱掘方で構成される掘立柱建物３・４・５と、基盤をつくる地山（第６層）上面から掘り込まれた可能性がある大型の柱掘方で構成される掘立柱建物１・２に類別される。

検出遺構には、掘立柱建物５棟のほか、溝状遺構２条、ピット 123 基がある。ただ、遺構の多くは遺物を伴っておらず、時期不詳のものである。遺物についてはほとんど出土しておらず、その総量は遺物収納コンテナ１箱分であった。

（２）遺構・遺物

掘立柱建物（SB）１（図８・９、写真４・18・20・69）

調査区中央部、調査区内の最も高位で検出した東西 3.8 ｍの２間、南北 5.8 ｍの２間と推定される総柱の掘立柱建物である。棟方向は明らかではないが、南北方向の柱列の方位から、建物方位はＮ－ 26°－ Ｅを計測する。柱間隔は、北側東西の柱列で 1.9 ｍ等間隔、西側南北の柱列で北から 2.9 ｍ、2.8 ｍを計測する。これら総柱建物の隅柱対角間の距離は SP １・９間で 6.8 ｍ、SP ３・７間で 7.0 ｍを測り、対角線交点の位置に掘り返しを伴う柱掘方を検出した。この柱掘方は、建物の四隅の柱からおおよそ 3.5 ｍの等間隔に据えられている。

柱掘方の平面形は一辺 60 ～ 80cm 前後の隅丸方形ないし径 60 ～ 80cm 前後の楕円形であったが、断面形が皿状となっていることから、柱材の抜き取りや据え替えなどが行われたとみられる。

柱掘方の残存状況は、西側の側・隅柱と中央の柱が深さ 30cm 前後を残存させ、ほかの側・隅柱の多くは深さ 20cm 前後を残存させる。一部の柱掘方では径 20 ～ 25cm の柱材の痕跡が残って

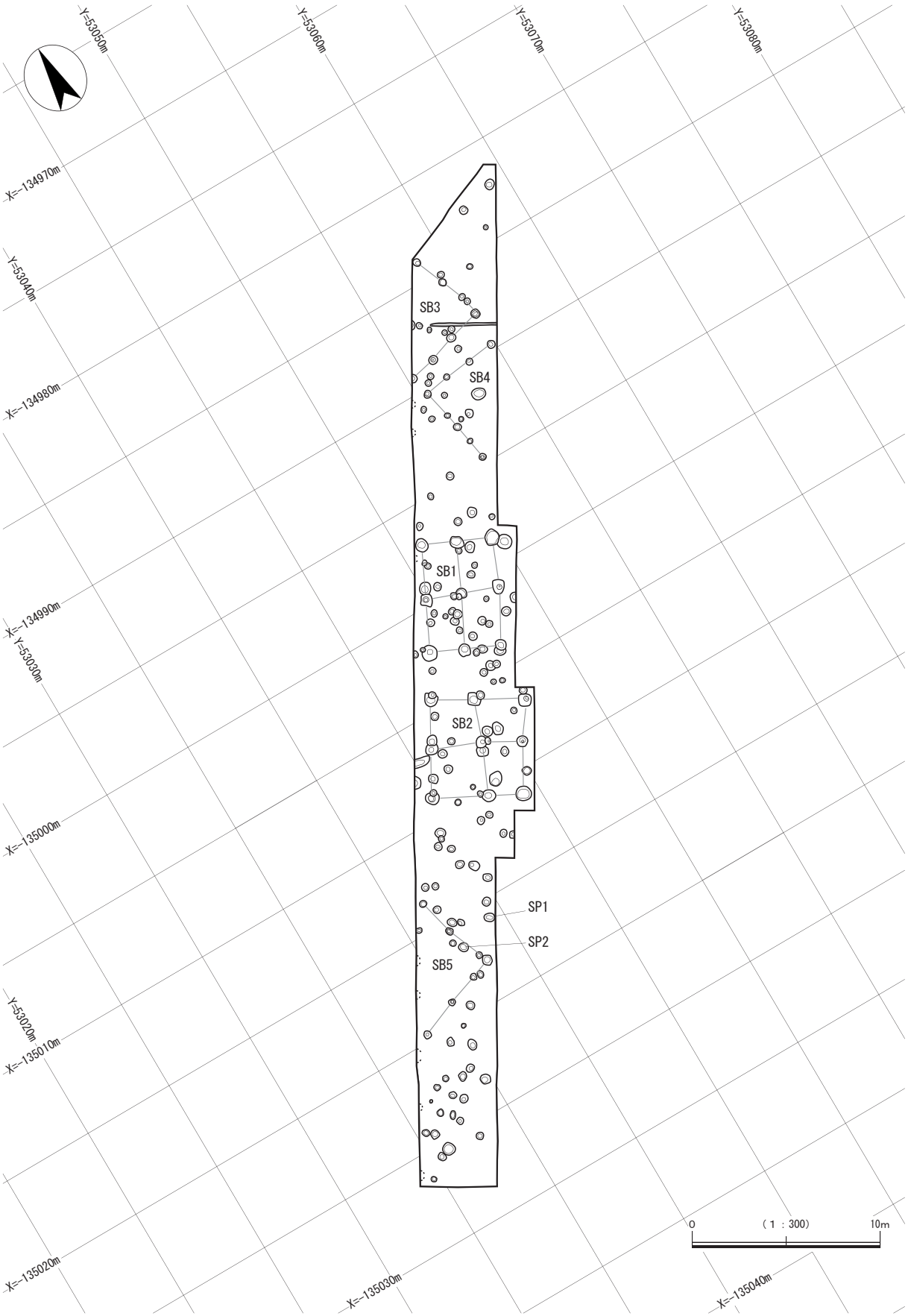
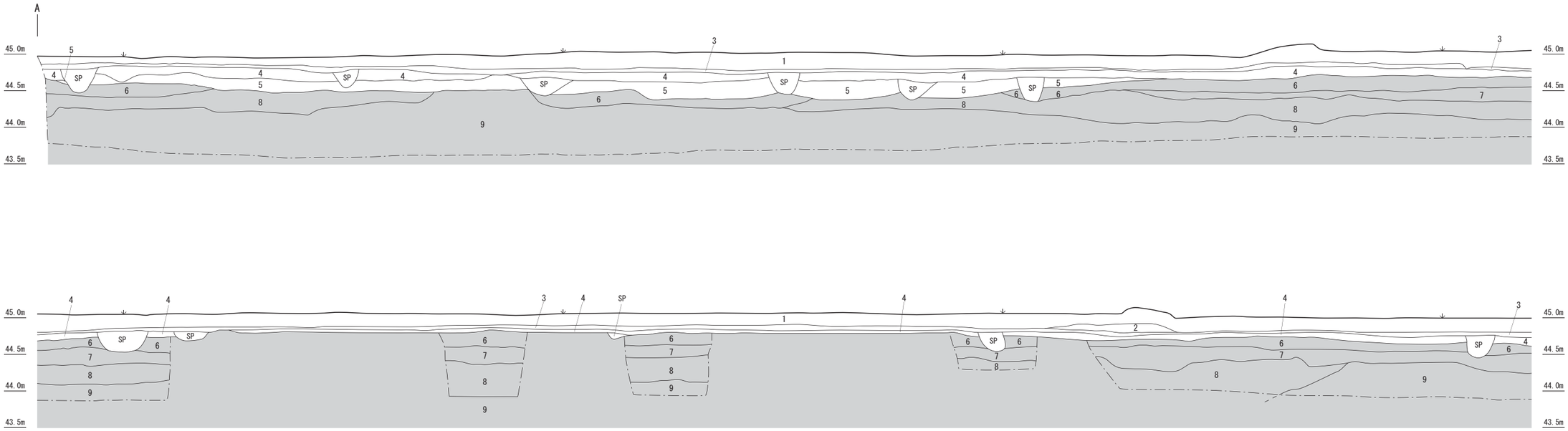


図６　調査区１遺構配置図



1　耕作土
2　畦畔形成土
3　5YR5/3 にぶい赤褐色粘性砂質土（床土）
4　2.5Y6/6 明黄褐色粘性砂質土　灰褐色砂質土混じる（遺物包含層）
5　5Y7/4 浅黄色粘性砂質土（遺物包含層）
6　10YR5/3 にぶい黄褐色粘性砂質土（地山）
7　10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土　橙色粘質土ブロック混じる（地山）
8　2.5YR4/6 赤褐色粘質土明青灰色粘性砂質土ブロック混じる（地山）
9　2.5YR4/3 にぶい赤褐色粘質土　明青灰色シルトブロック混じる　φ30 mmの円礫含む（地山）

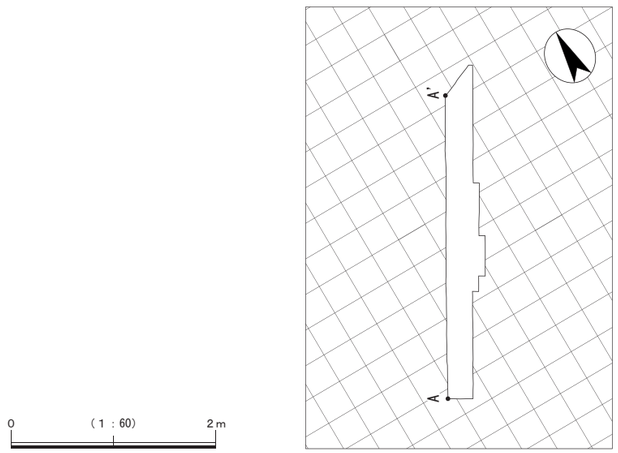


図7　調査区1土層断面図

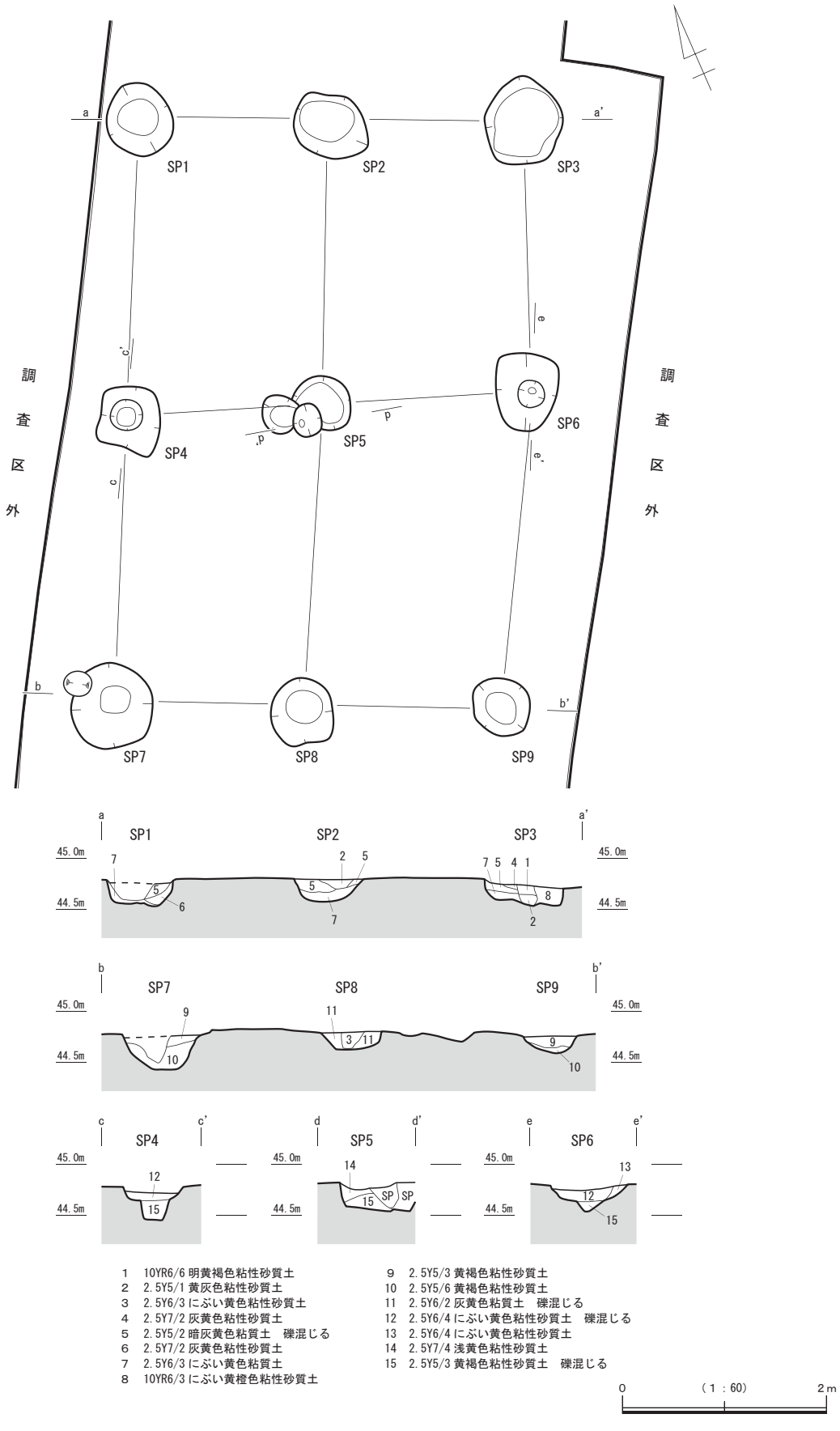

調査区外
調査区外
SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
SP7
SP8
SP9
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
e
e'
45.0m
44.5m
1 10YR6/6 明黄褐色粘性砂質土
2 2.5Y5/1 黄灰色粘性砂質土
3 2.5Y6/3 にぶい黄色粘性砂質土
4 2.5Y7/2 灰黄色粘性砂質土
5 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 礫混じる
6 2.5Y7/2 灰黄色粘性砂質土
7 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土
8 10YR6/3 にぶい黄橙色粘性砂質土
9 2.5Y5/3 黄褐色粘性砂質土
10 2.5Y5/6 黄褐色粘性砂質土
11 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 礫混じる
12 2.5Y6/4 にぶい黄色粘性砂質土 礫混じる
13 2.5Y6/4 にぶい黄色粘性砂質土
14 2.5Y7/4 浅黄色粘性砂質土
15 2.5Y5/3 黄褐色粘性砂質土 礫混じる
0
(1 : 60)
2m

図８　掘立柱建物（SB）１

いた。

遺物は、SP ２の上層から弥生土器が出土した。１は、弥生土器の壺もしくは鉢の底部片とみられる。底部外面の仕上げは粗く、凸底状を呈している。この出土遺物や、遺物包含層（第４層）より古い時期に掘り込まれたと考えられることから、SB １の時期は弥生時代後期後半頃と推定しておきたい。

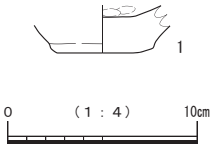


図９　掘立柱建物（SB）１出土遺物

掘立柱建物（SB）２（図 10、写真４・19・21）

調査区中央部、SB １の南側で検出した東西 5.1 ｍの２間、南北 5.2 ｍの２間と推定される総柱の掘立柱建物である。棟方向は明らかではないが、南北方向の柱列の方位から、建物方位はＮ－ 28°－ Ｅを計測する。柱間隔は、北側東西の柱列で西から 2.3 ｍ、2.8 ｍを測り、西側南北の柱列で 2.6 ｍ等間隔を計測する。これら総柱建物の隅柱対角間の距離は SP １・９間で 7.0 ｍ、SP ３・７間で 7.4 ｍを測り、対角線交点とは若干ずれた位置に据え替えを伴う柱掘方を検出した。

柱掘方は一辺 70cm 前後の隅丸方形、もしくは径 60 ～ 80cm 前後の楕円形の形態で検出されたが、断面形が皿状となっていることから、柱材の抜き取りや据え替えなどが行われたとみられる。また、抜き取られた柱掘方のすぐ脇に径 30 ～ 50cm 前後の別の柱掘方を設け、据え替えを行っているものも認められる。

柱掘方の残存状況は、東側の側・隅柱が深さ 30cm 前後を残存させ、中央の柱とほかの側・隅柱は深さ 20cm 前後を残存させる。一部の柱掘方では径 20 ～ 25cm の柱材の痕跡が残っていた。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、建物の形態や方位が SB １と類似することから、SB １と同じ弥生時代後期後半頃の可能性があると考えられる。

掘立柱建物（SB）３（図 11、写真５・22）

調査区北部西壁沿いで検出した東西 4.8 ｍの３間以上、南北 4.2 ｍの３間以上と推定される掘立柱建物である。建物の北西側は調査区外となっている。棟方向は明らかではないが、南北方向の柱列の方位から、建物方位はＮ－ 16°－ Ｗを計測する。柱間隔は、南側東西の柱列で西から 1.4 ｍ、1.6 ｍ、1.8 ｍ、東側南北の柱列で北から 1.7 ｍ、1.3 ｍ、1.2 ｍを計測する。南東隅柱とその北側の柱間隔は狭く、一部掘り替えもみられ、柱掘方が浅く掘られていることから、南東側隅に入口などの設備に関わる柱が据えられていた可能性がある。

柱掘方は径 40 ～ 50cm 前後の円形で、20cm 前後掘り下げている。ただ、柱掘方のなかには、SP ４や SP ６のように浅いものも認められる。一部の柱掘方では径 20cm 前後の柱材の痕跡が残っていた。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、後述の SB ５と建物方位が類似することから、平安時代後期から鎌倉時代頃の可能性があると考えられる。

掘立柱建物（SB）４（図 12、写真５・22）

調査区北部東壁沿いで検出した東西 4.3 ｍの３間以上、南北 4.5 ｍの４間以上と推定される掘立柱建物である。建物の南東側は調査区外となっている。棟方向は明らかではないが、南北方向の柱列の方位から、建物方位はＮ－ 10°－ Ｗを計測する。柱間隔は、北側東西の柱列でおおよそ 1.4 ｍ等間隔、西側南北の柱列で北から 1.6 ｍ、0.8 ｍ、1.0 ｍ、1.1 ｍを計測する。西側の一部

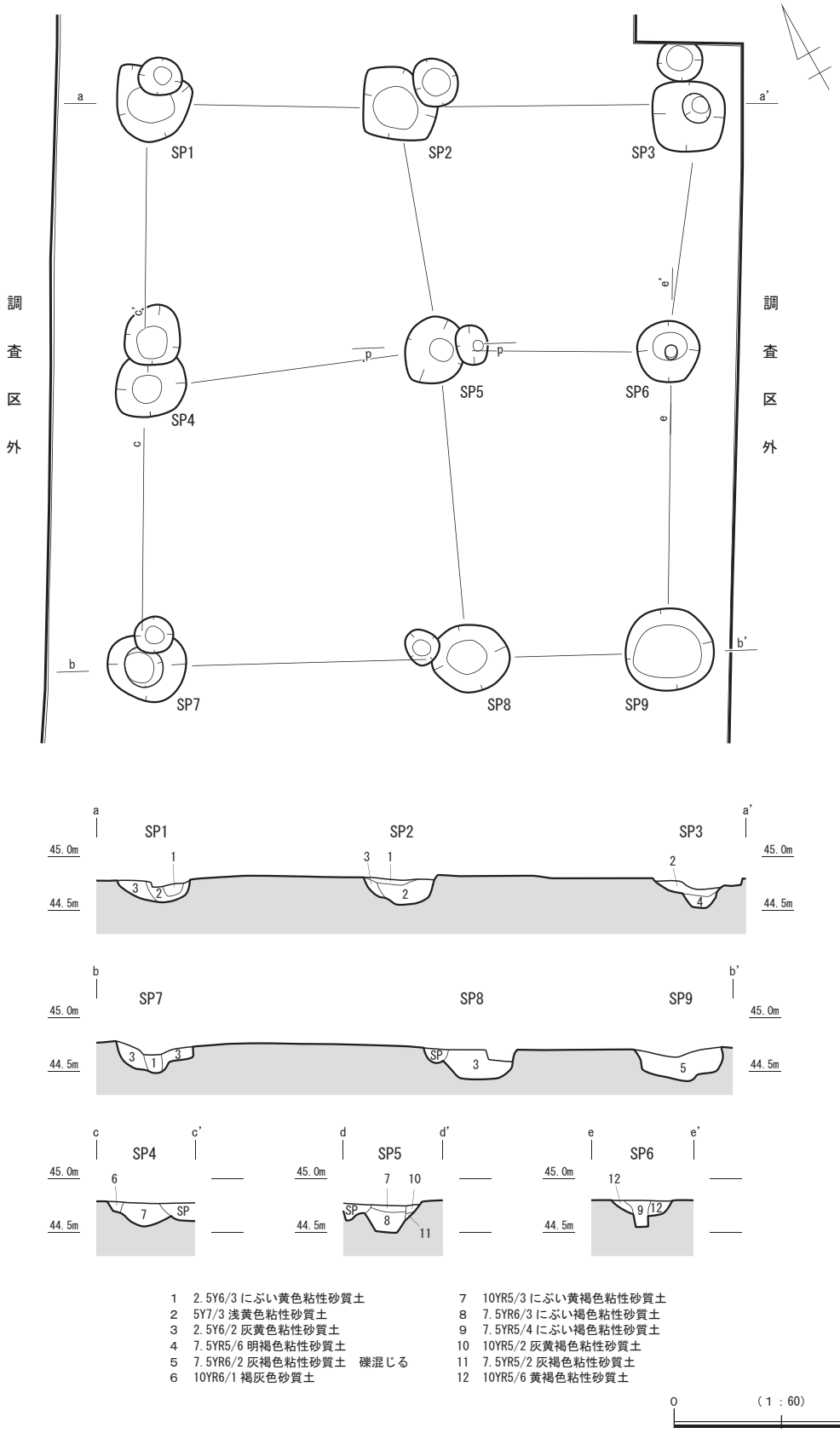


図 10　掘立柱建物（SB）2

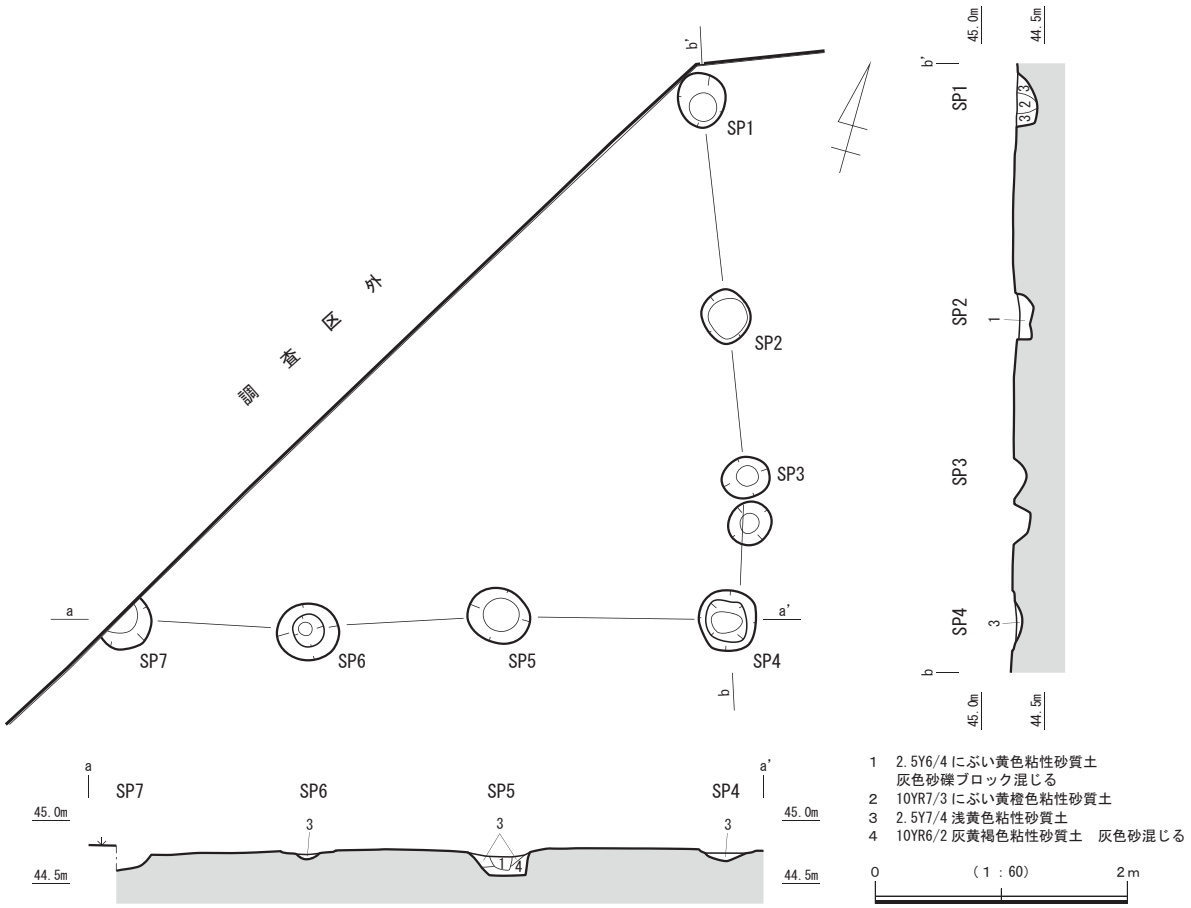


図 11　掘立柱建物（SB）3

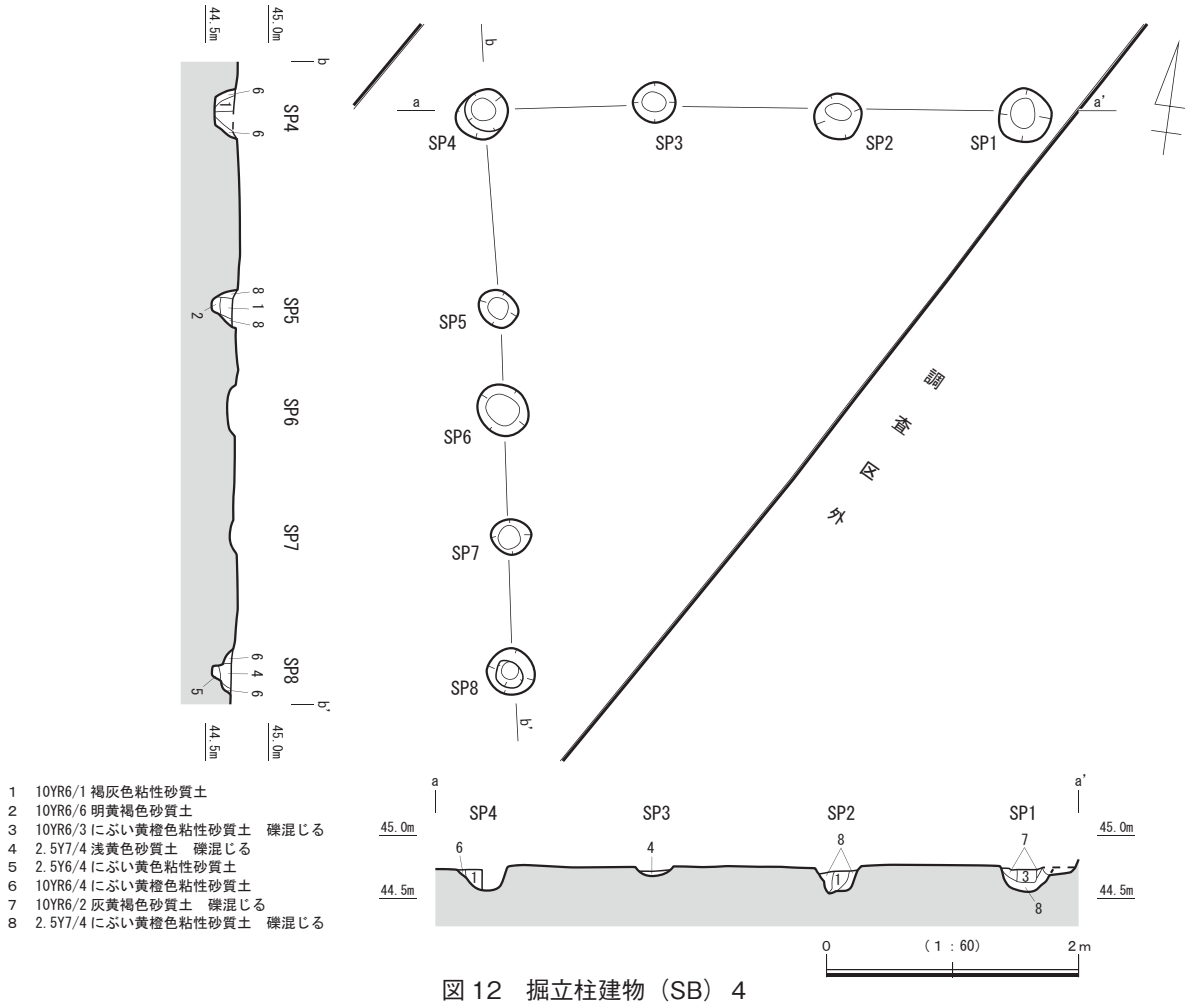


図 12　掘立柱建物（SB）4

の柱間隔は狭く、柱掘方が浅く掘られていることから、西側に入口などの設備に関わる柱が据えられていた可能性がある。

柱掘方は径 30 ～ 40cm 前後の円形で、20cm 前後掘り下げており、一部の柱掘方では径 10 ～ 20cm の柱材の痕跡が残っていた。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、SB 4 と同様、後述する SB 5 と建物方位が類似することから、平安時代後期から鎌倉時代頃の可能性があると考えられる。

掘立柱建物（SB）5（図 13、写真 6・23 ～ 25）

調査区南部西壁沿いで検出した東西 5.1 mの３間以上、南北 4.5 mの２間以上と推定される掘立柱建物である。建物の北西側は調査区外となっている。棟方向は明らかではないが、南北方向の柱列の方位から、建物方位は約 - 20° - Wを計測する。柱間隔は、南側東西の柱列で東から 1.2 m、1.7 m、2.2 m、東側南北の柱列で南から 2.5 m、2.0 mを計測する。なお、南東隅の柱掘方については北側に据え替えられた可能性がある。

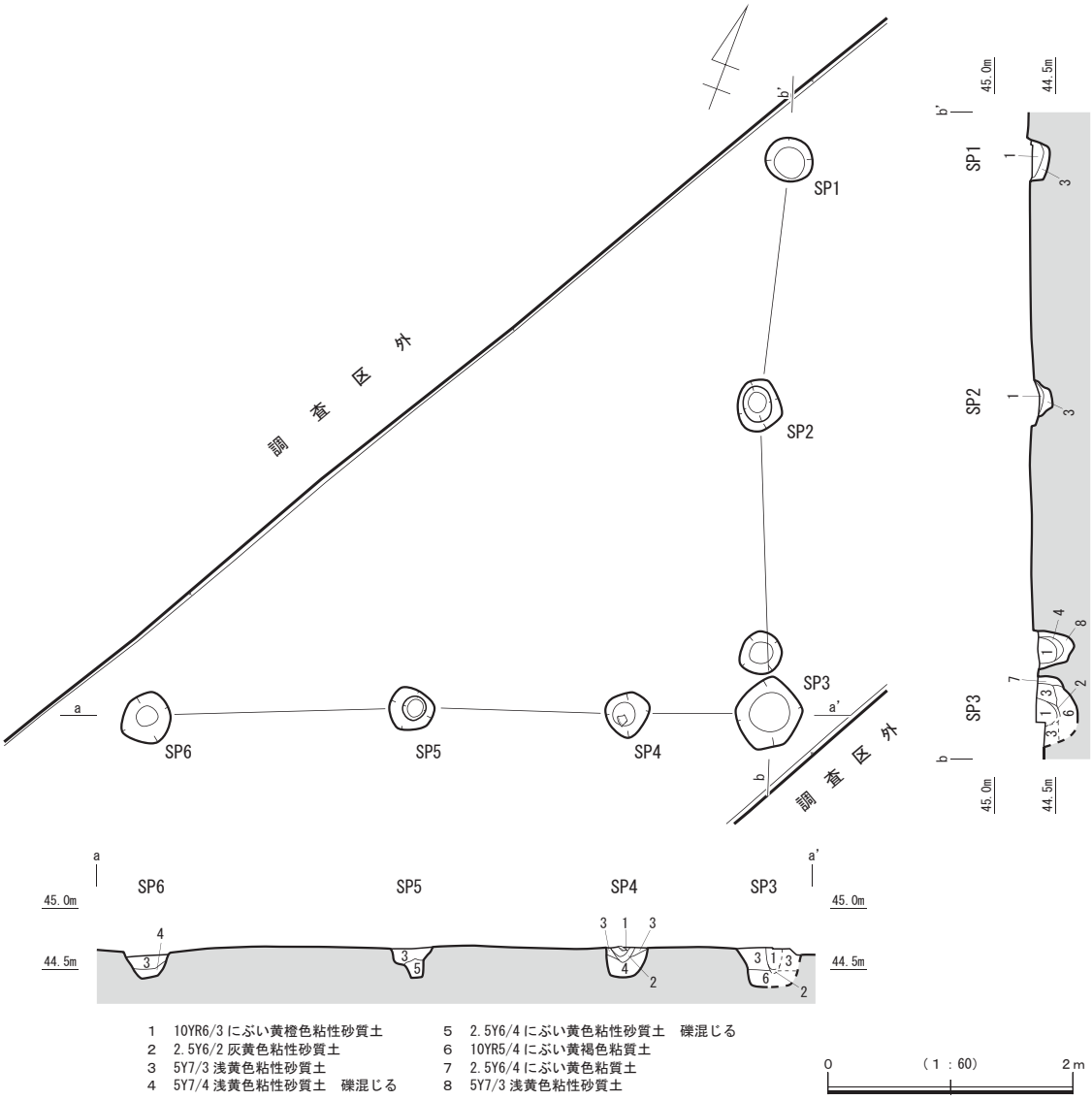


図 13　掘立柱建物（SB）5

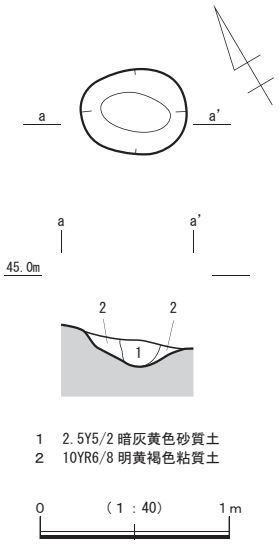


図 14　ピット（SP）1

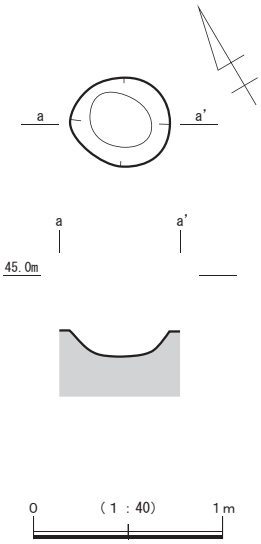


図 15　ピット（SP）2

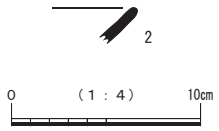


図 16　ピット（SP）1 出土遺物

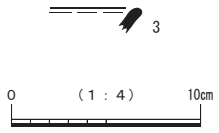


図 17　ピット（SP）2 出土遺物

柱掘方は南東隅柱が径 60cm 前後の不整円形、側柱が 30 ～ 40cm 前後の円形で、20 ～ 40cm 前後掘り下げており、一部の柱掘方では径 20cm 前後の柱材の痕跡が残っていた。

遺物は、SP 5 上面から須恵器片が出土した。小片のため図化しえなかったが、いわゆる東播系須恵器鉢の体部片とみられ、平安時代後期から鎌倉時代頃のものとみられる。また、後述する周辺のピットにおいても、この須恵器と同時期頃とみられる須恵器片が出土していることから、SB 5 の時期は平安時代後期から鎌倉時代頃と推定しておきたい。

ピット（SP）1（図 14・16、写真 26・69）

SB 5 の東側で検出されたピットである。長軸 55cm 前後の楕円形を呈したピットで、ほぼ中心に径 20cm 前後の柱材痕跡が残存するが、対応するピットは確認できていない。

遺物は、須恵器片 1 点が出土した。2 は、須恵器椀の口縁部の小片である。詳細な時期決定は困難であるが、平安時代後期から鎌倉時代頃のものとみられる。

ピット（SP）2（図 15・17、写真 69）

SB 5 の建物範囲に重複して検出されたピットである。径 50cm 前後の円形のピットであるが、SP 1 と同様に、対応するピットは確認できていない。

遺物は、須恵器片が 1 点出土した。3 は、須恵器椀の口縁部の小片である。詳細な時期決定は困難であるが、SP 1 出土須恵器片と同時期頃のものとみられる。

遺物包含層等出土遺物（図 18、写真 69）

遺物包含層などから、弥生時代から近世にかけての遺物が僅かに出土した。ただ、いずれも小片であるため、ここでは図化可能であった 7 点の遺物について報告する。

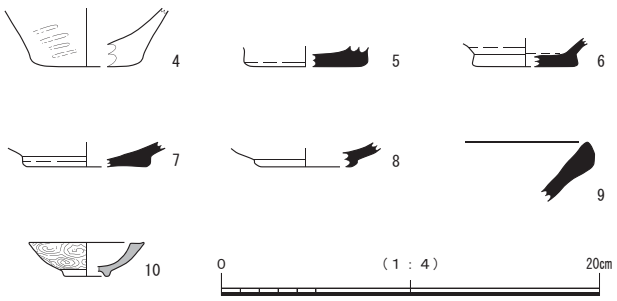


図 18　調査区 1 包含層等出土遺物

４は、弥生土器甕の底部片である。内外面ともにかなり磨滅しているが、外面の一部にタタキがみられる。５～８は、須恵器椀の底部片で、５～７の底部外面には回転糸切り痕が確認できる。９は、須恵器鉢の口縁部で、いわゆる東播系須恵器である。10 は、肥前産磁器の紅皿とみられ、外面には型押しによる蛸唐草文がみられる。

２．調査区２

（１）検出遺構の概要と基本層序（図 19・20）

調査時点において、調査区２の周辺は、その大部分が田畑として利用されている農地であったが、一部私有地として利用されている土地が含まれていた。そのため、実際の発掘作業では、この私有地を境に調査区を分けて発掘調査を実施することになった。私有地より南東側が調査区２－１で、北西側が調査区２－２である。

周辺の地表面は、農道を挟んだ北側の農地よりやや低く、南西下がりの緩やかな斜面となっている。調査区２－１のほぼ中央から南東側では、耕作土の下位に堆積する灰オリーブ色粘性砂質土（第５層）直下で地山（第８層）面を確認し、この地山面上で遺構検出を行った（図 20 Ｂ－Ｂ’）。地山面は、調査区の南東側を最高所として北西側に向かって下がっており、特に調査区の北西部では農地造成土とみられる分厚い客土の堆積が認められた。そのため、調査区の北西部の一部では、この客土層下位の地山（第７層）面上で遺構検出を行った。

一方、調査区２－２では、南西側の崖面に向かって傾斜しながら表土などが分厚く堆積しており、地表下 60cm 前後で地山（第９層）面を確認し、この地山面上で遺構検出を行った（図 20 Ｃ－Ｃ”）。

検出遺構には、竪穴建物２棟、掘立柱建物２棟、周溝墓３基、木棺墓９基のほか、土坑５基、ピット 64 基があり、時期の異なる遺構が一部重複した状態で検出された。ただ、遺構の多くは遺物を伴っておらず、時期不詳のものである。遺物については、調査区１と同様、ほとんど出土しておらず、その総量は遺物収納コンテナ１箱分であった。

（２）遺構・遺物

竪穴建物（SI）１（図 21、写真 29～31）

調査区２－１の南東部で検出した掘方の平面形が五角形と推定される竪穴建物である。調査区域内で検出した竪穴掘方の隅部は直交せず、竪穴掘方の各辺は、調査区西壁沿いで検出した西辺に対して約 110° の角度で北辺がとりつき、南西隅では西辺に対して約 100° の角度で南辺がとりつく。また、北辺にとりつく東辺は、東側調査区外に及んでいるものの、検出した周壁溝隅部が北辺に対して約 110° を計測する。このような竪穴掘方隅角の状況と全形を検出した西辺の長さ 6.0 m、北辺の長さ 3.0 mから推定される竪穴掘方の平面形は、調査区外の南東隅部を頂点とするやや縦長の五角形と推定される。

その構築をみると、地山を掘り込んで竪穴床面としている。この竪穴床面から掘方沿いに幅 12cm 前後､深さ 10cm 前後の断面Ｕ字形の周壁溝を掘り込み竪穴壁体を造成しているとみられる。なお、西壁及び南壁沿いでは、壁体を止める径 20～25cm 前後、深さ 20cm 前後の杭を打ち込んだ痕跡を残している。竪穴建物の上屋を支える柱穴は、径 50～60cm 前後、深さ 10～25cm 前後を計測する柱掘方を４か所で検出した（SP １～４）。

竪穴建物の床面上では、中央西寄りで径 80cm、深さ 20cm 前後の断面形椀形の浅い土坑を検出したが、その性格は不明である。

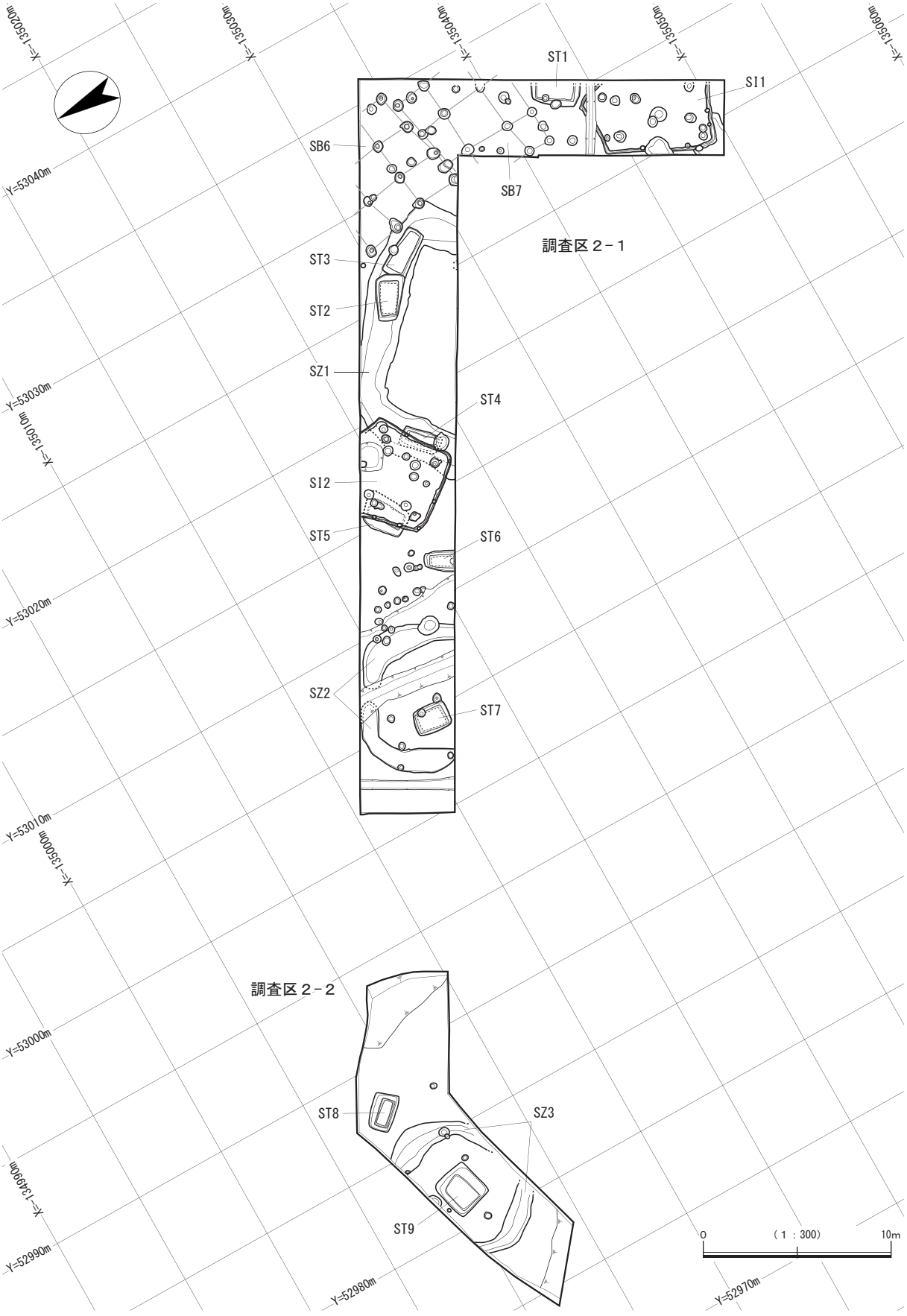
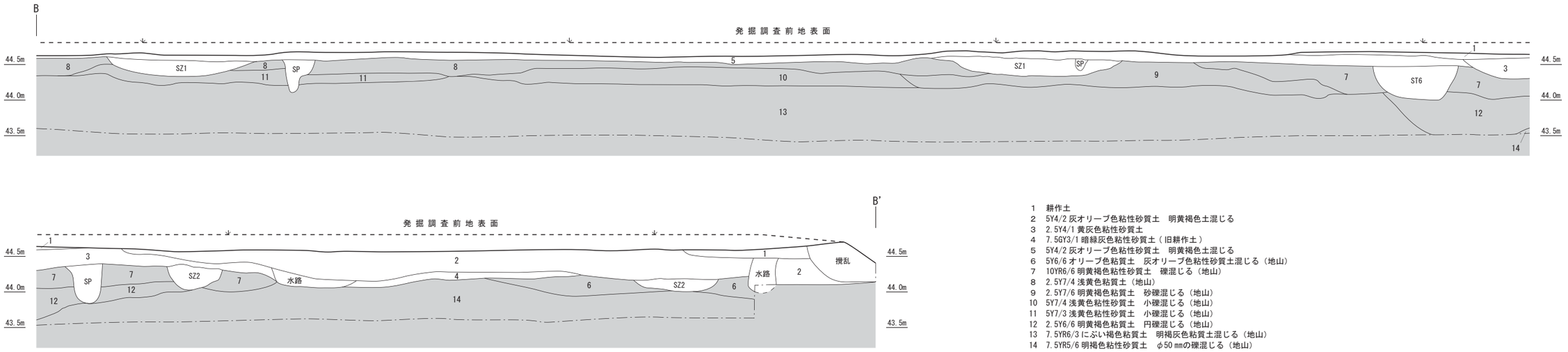


図 19　調査区２遺構配置図



1　耕作土
2　5Y4/2 灰オリーブ色粘性砂質土　明黄褐色土混じる
3　2.5Y4/1 黄灰色粘性砂質土
4　7.5GY3/1 暗緑灰色粘性砂質土（旧耕作土）
5　5Y4/2 灰オリーブ色粘性砂質土　明黄褐色土混じる
6　5Y6/6 オリーブ色粘質土　灰オリーブ色粘性砂質土混じる（地山）
7　10YR6/6 明黄褐色粘性砂質土　礫混じる（地山）
8　2.5Y7/4 浅黄色粘質土（地山）
9　2.5Y7/6 明黄褐色粘質土　砂礫混じる（地山）
10　5Y7/4 浅黄色粘性砂質土　小礫混じる（地山）
11　5Y7/3 浅黄色粘性砂質土　小礫混じる（地山）
12　2.5Y6/6 明黄褐色粘質土　円礫混じる（地山）
13　7.5YR6/3 にぶい褐色粘質土　明褐灰色粘質土混じる（地山）
14　7.5YR5/6 明褐色粘性砂質土　φ50㎜の礫混じる（地山）

1　10YR4/1 褐灰色砂質土（表土１）
2　5PB5/1 青灰色粘性砂質土（表土２）
3　7.5YR6/3 にぶい褐色粘質土　礫混じる
4　7.5YR4/4 にぶい橙色粘質土　礫混じる
5　7.5YR5/3 にぶい褐色粘性砂質土
6　10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
7　7.5YR5/2 灰褐色砂質土
8　7.5YR5/3 にぶい褐色砂質土
9　10YR7/8 黄橙色砂質粘土（地山）
10　5YR5/4 にぶい赤褐色砂質粘土（地山）

0　（１：60）　2m

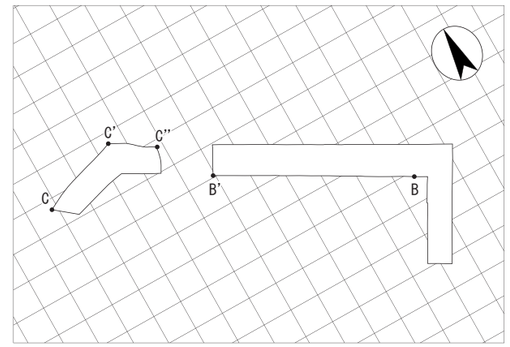


図 20　調査区２土層断面図

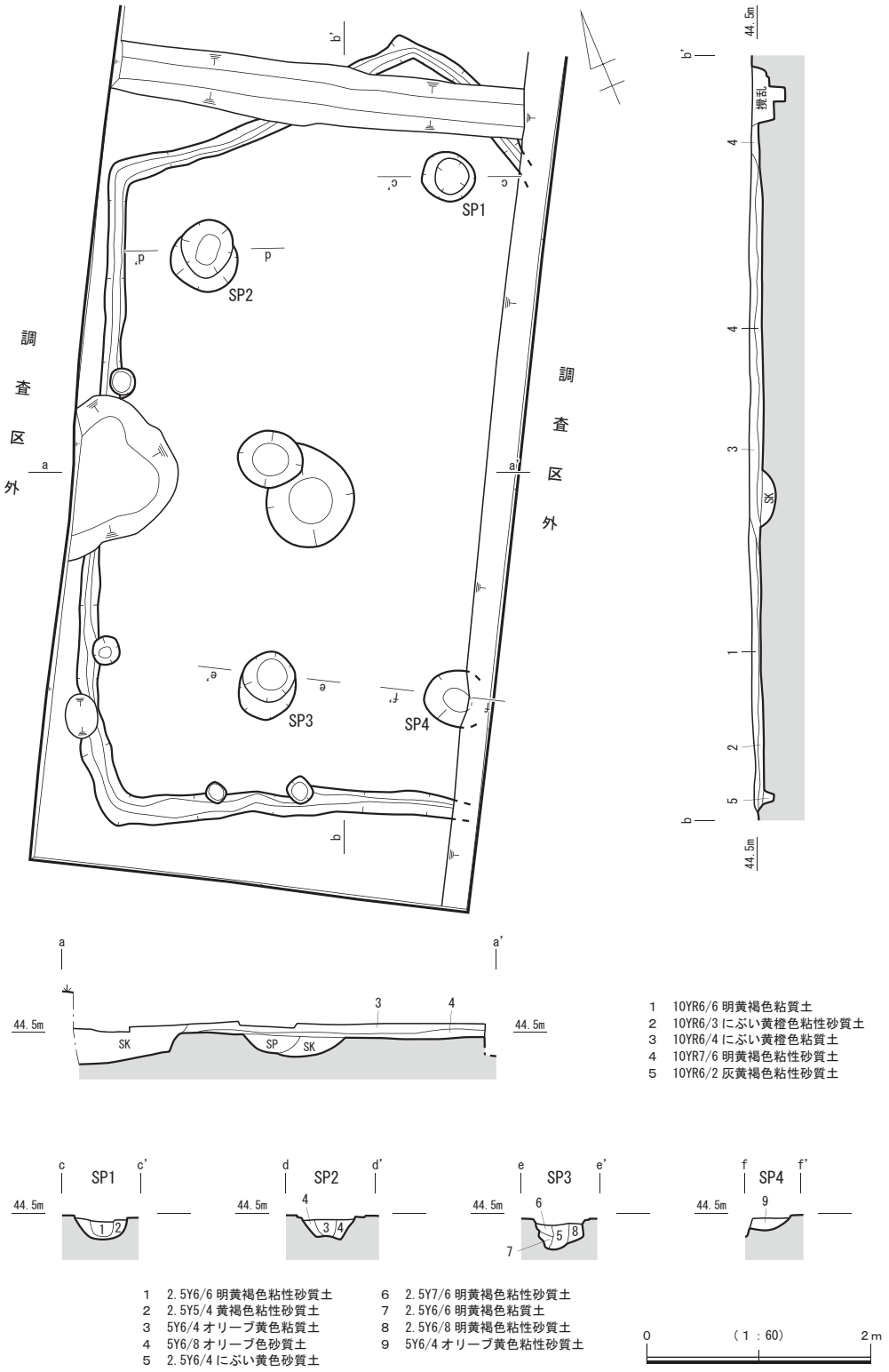

調査区外
調査区外
SP1
SP2
SP3
SP4
撹乱
SK
44.5m
1 10YR6/6 明黄褐色粘質土
2 10YR6/3 にぶい黄橙色粘性砂質土
3 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
4 10YR7/6 明黄褐色粘性砂質土
5 10YR6/2 灰黄褐色粘性砂質土
1 2.5Y6/6 明黄褐色粘性砂質土
2 2.5Y5/4 黄褐色粘性砂質土
3 5Y6/4 オリーブ黄色粘質土
4 5Y6/8 オリーブ色砂質土
5 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土
6 2.5Y7/6 明黄褐色粘性砂質土
7 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土
8 2.5Y6/8 明黄褐色粘性砂質土
9 5Y6/4 オリーブ黄色粘性砂質土
0 (1:60) 2m

図 21　竪穴建物（SI）1

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、後述するSI 2と形態的に類似することから、SI 2と同じく古墳時代中期以降の可能性があると考えられる。

竪穴建物（SI）2（図22、写真9・32～37）

調査区2－1の中央部で検出した掘方の平面形が五角形と推定される竪穴建物である。調査区域内で検出した竪穴掘方の隅部は直交せず、竪穴掘方の各辺は、南西辺に対して約95°の角度で南東辺と北西辺がとりつき、東隅では南東辺に対して約112°の角度で東辺がとりつく。このような竪穴掘方隅角の状況と全形を検出した長さ4.5 mの南西辺と、同じく長さ4.5 mの南東辺から推定される竪穴掘方の平面形は、調査区外の北部を頂点とする「駒形」の五角形と推定される。

その構築をみると、地山を掘り込んで竪穴の基底をつくり、この面ににぶい橙色粘性砂質土を敷き詰めて均し、竪穴床面としている。この竪穴床面から掘方沿いに幅15～25cm前後、深さ15cm前後の周壁溝を断面U字形に掘り込み、各辺の壁溝では壁体止めとみられる径15～25cm

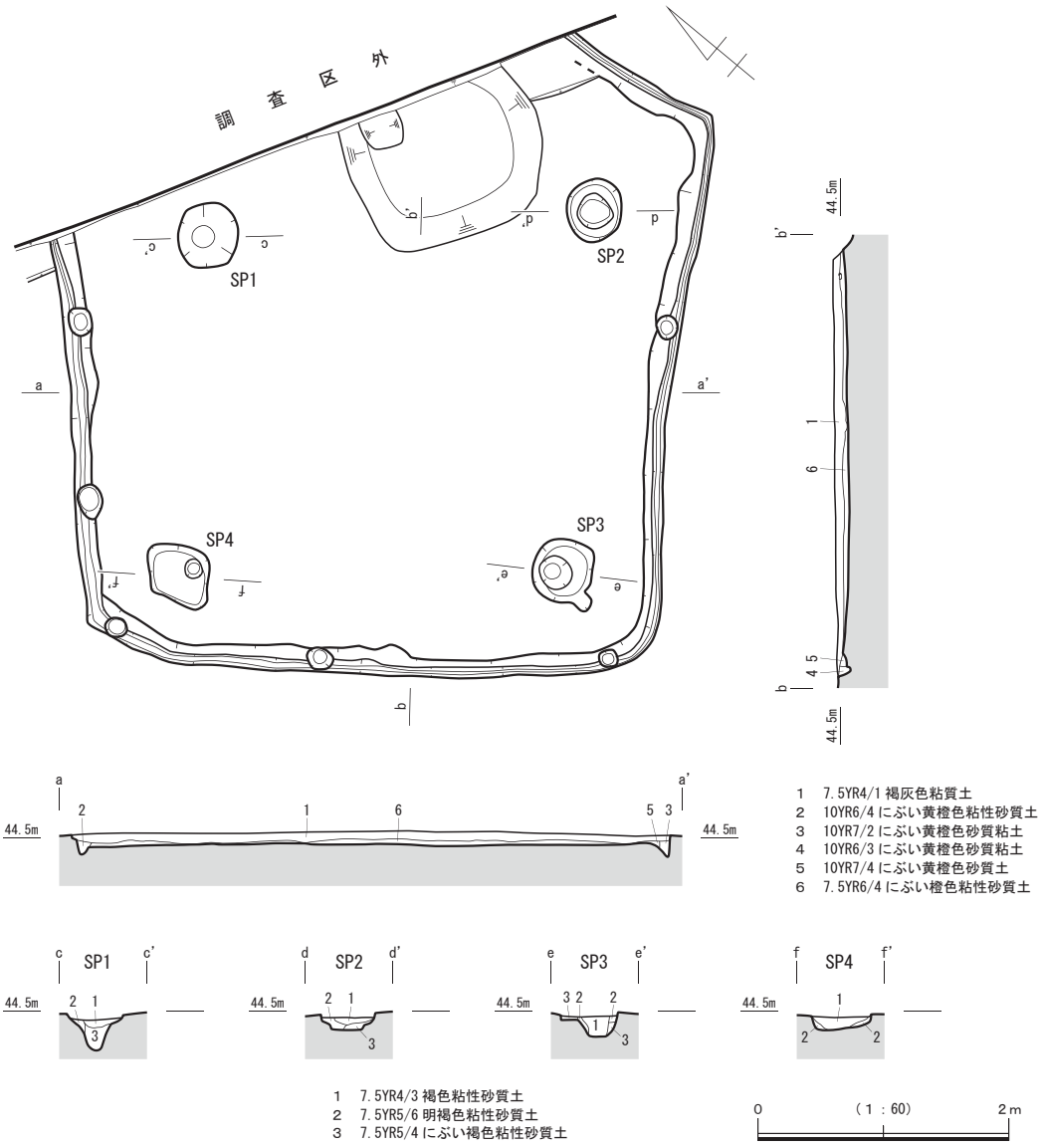


図22　竪穴建物（SI）2

前後、深さ 20cm 前後の杭の痕跡を残している。竪穴建物の上屋を支える柱穴は、径 50cm 前後、深さ 25cm 前後を計測する柱掘方を４か所で検出した（SP １～４）。この支柱の柱間の間隔はおおよそ 3.0 m等間隔である。竪穴内では、炉跡や貯蔵穴などの施設は検出されなかった。

遺物の出土は僅かで、小片のため図化し得なかったが、床面形成土から須恵器壺もしくは甕の胴部片とみられる小片などが出土した。そのため、詳細な時期を決定することは困難であるが、出土遺物から古墳時代中期以降と推定しておきたい。

掘立柱建物（SB）６（図 23、写真 38 ～ 40）

調査区２－１の東部、調査区がＬ字状になった場所で検出した掘立柱建物である。東西 5.9 m の３間以上、南北 5.9 m以上の３間以上と推定され、建物の軸をＮ - 11° - Wに振る南北方向の総柱建物である。柱間の間隔は、東西の側柱で 1.8 ～ 2.1 m間隔、南北の側柱で 1.7 ～ 2.3 m間隔である。なお。柱列は北側と東側に展開する可能性がある。

柱掘方は、柱の抜き取りなどで周囲が掘り込まれて歪であるが、外側の柱並びで一辺 60cm 前後の隅丸方形掘方、もしくは径 60cm 前後の楕円形掘方で、内側の束柱と考えられる柱掘方が一辺 50cm 前後の隅丸方形掘方である。いずれの柱掘方も深さ 10cm 前後しか残存せず、掘方底に柱据え付け部の痕跡、もしくは断面に柱の抜き取り痕跡を残している。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、調査区１で検出されている SB ５と建物方位が類似することから、平安時代後期から鎌倉時代頃の可能性があると考えられる。

掘立柱建物（SB）７（図 24、写真 10・41・42）

調査区２－１の東部、SB ６の南側に一部重複して建てられた掘立柱建物である。東西 6.3 mの３間以上、南北 5.3 mの３間と推定され、建物の軸をＮ - ８° - Wに振る南北方向の総柱建物である。柱間の間隔は、東西の側柱で 1.8 ～ 2.5 m間隔、南北の柱間で北から 1.3 m、2.5 m、1.5 mである。なお、柱列は西側に展開する可能性がある。

柱掘方は、柱の抜き取りなどで周囲が掘り込まれて歪なものもあるが、大半が径 50 ～ 70cm 前後の円形掘方である。いずれの柱掘方も深さ 15 ～ 20cm 前後残存している。一部の柱掘方は明瞭な柱痕跡を残し、または断面で柱の抜き取り痕跡が確認できる。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、調査区１で検出されている SB ５と建物方位が類似することから、平安時代後期から鎌倉時代頃の可能性があると考えられる。

周溝墓（SZ）１（図 25・26、写真 12・43 ～ 45・70）

調査区２－１の中央やや東寄りの調査区南西壁沿いにおいて検出した「コ」字形の方形にめぐる溝状遺構で、周溝墓に伴う溝とみられる。周溝は、南西側と北側隅部の一部で調査区外となるが、周溝の外側からの測定で一辺の長さ 12.0 ～ 13.0 mの規模で掘られている。北西辺を古墳時代中期以降の SI ２竪穴掘方の南東辺によって上端の一部が削平されているものの、全体としては幅 2.0 ～ 2.3 m前後、深さ 20cm 前後で、断面形が皿状に残存している。この周溝に囲繞されて調査区南西壁沿いに検出された方形壇は、地山を削り出して成形されており、現状での頂部北東辺での長さは 8.5 mを計測する。なお、方形壇上面において、墓壙などの埋葬施設は検出されなかったものの、周溝内からは後述する木棺墓３基（ST ２～４）が検出されており、溝内埋葬と考えられる。

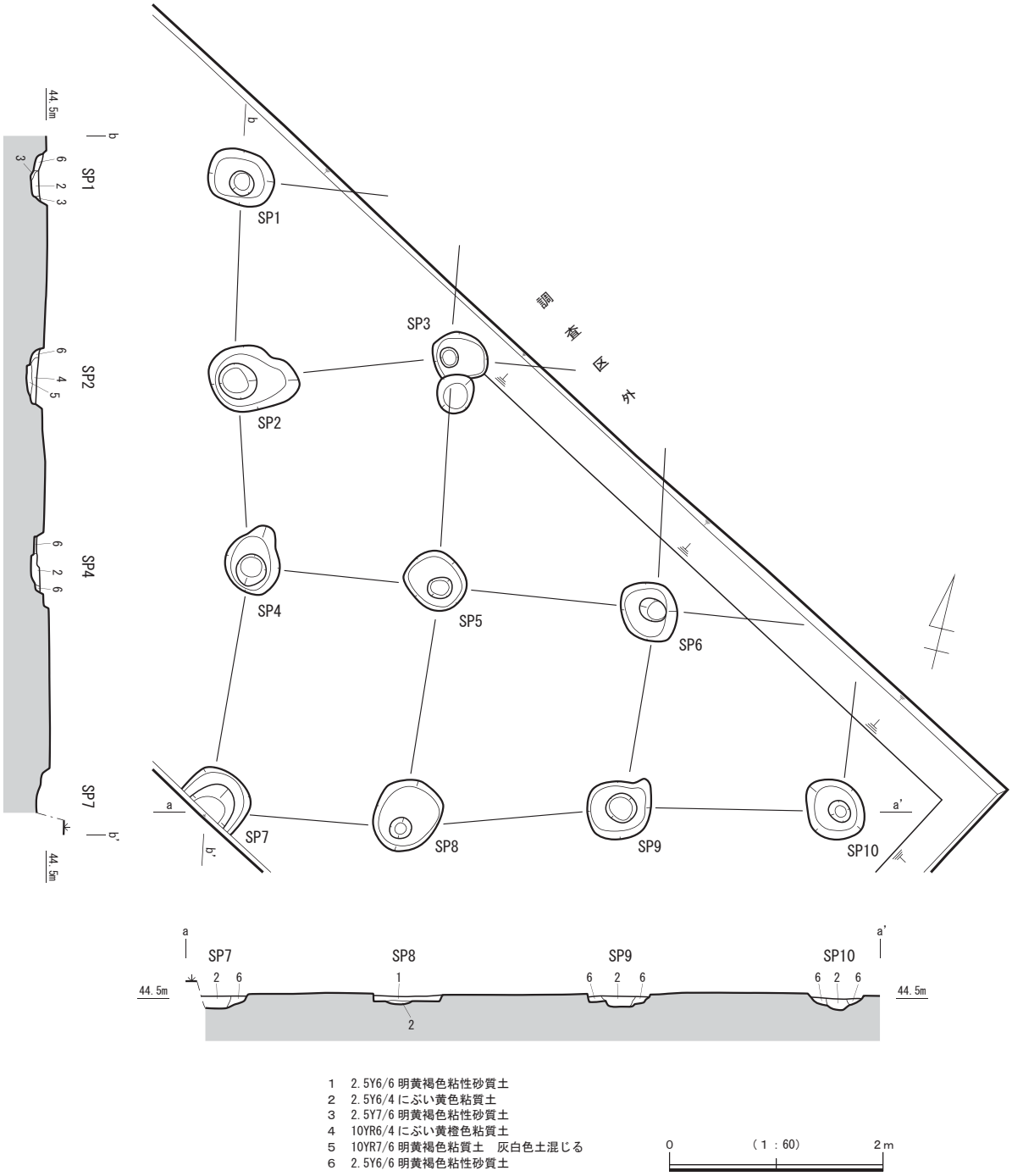


図 23　掘立柱建物（SB）6

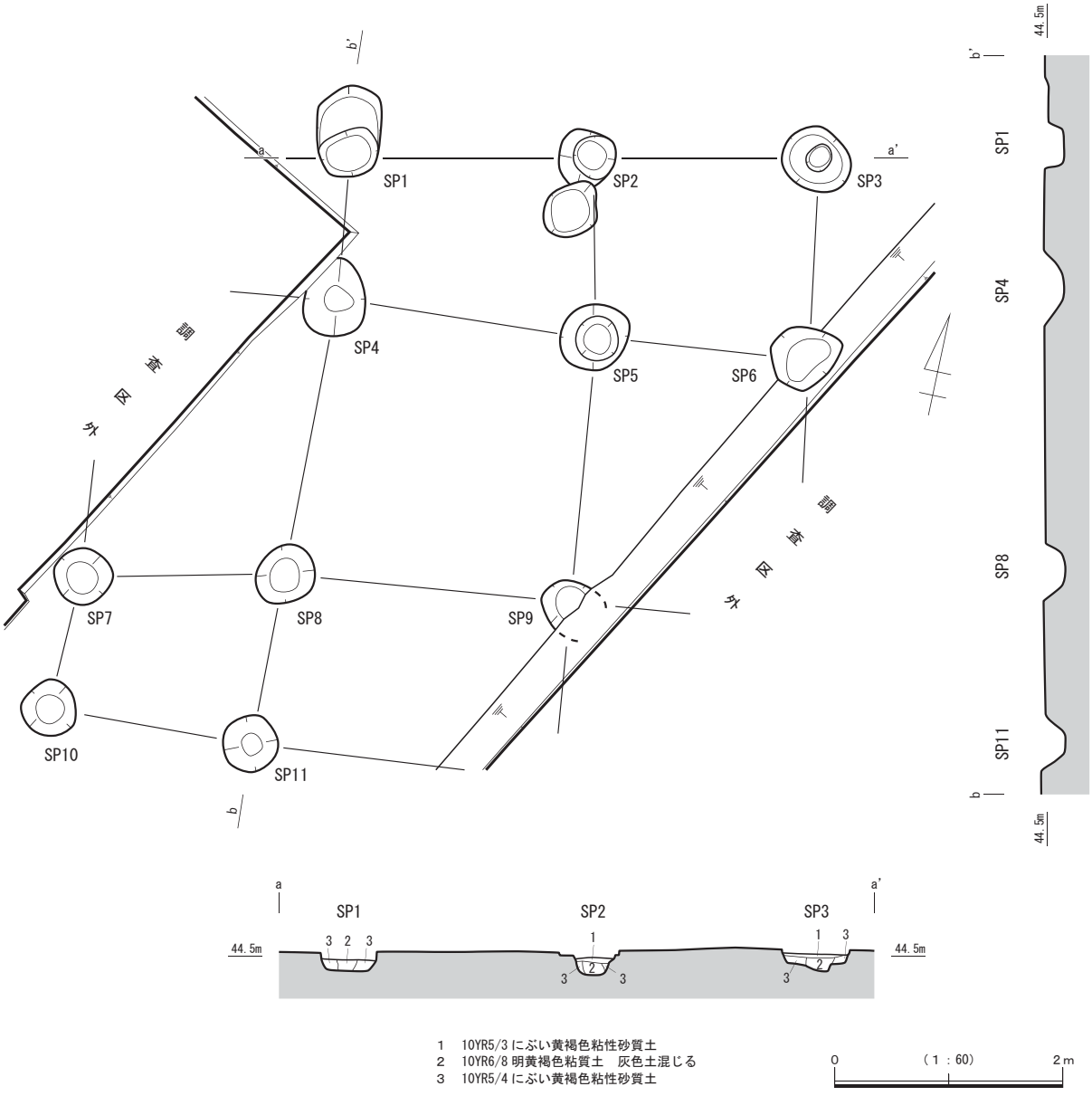


図 24　掘立柱建物（SB）7

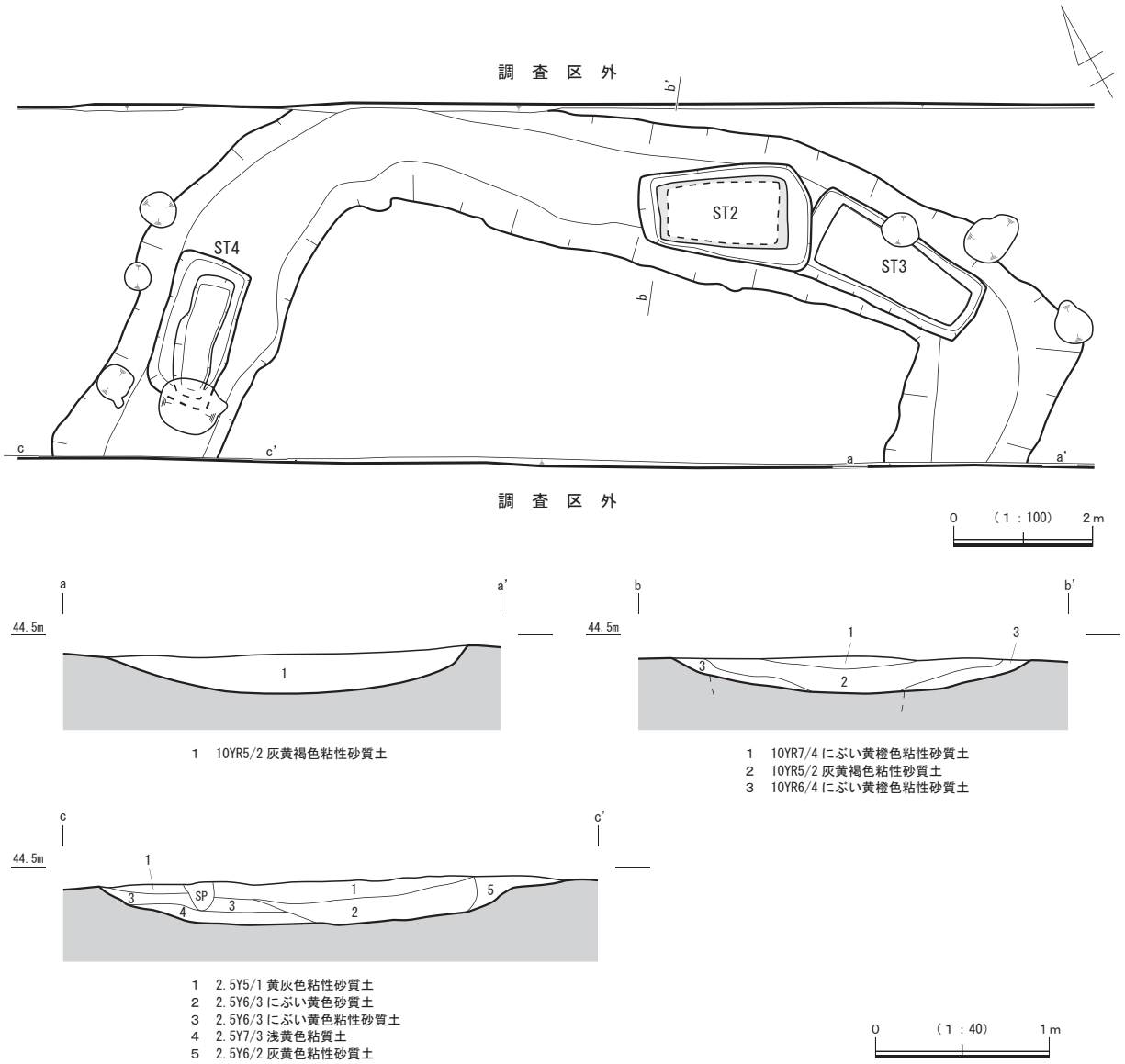


図 25　周溝墓（SZ）1

遺物は、周溝埋土から弥生土器が少量出土した。11 は、弥生土器壺の底部片とみられる。12 は、弥生土器壺の体部の小片である。内外面ともに磨滅が著しいが、タテハケの後、櫛描直線文・波状文を施している。これらの出土遺物から、SZ 1 の時期は弥生時代中期後半頃と推定される。

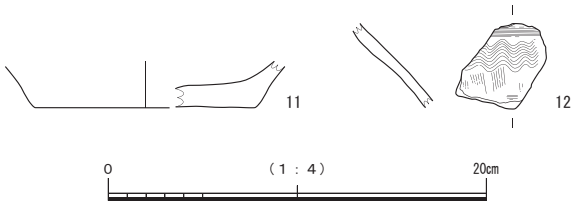


図 26　周溝墓（SZ）1 出土遺物

周溝墓（SZ）2（図 27、写真 13・46 ～ 48）

調査区２－１の西部において検出した隅丸方形状にめぐる溝状遺構で、周溝墓に伴う溝とみられる。南西側は調査区外となるが、周溝の外側からの測定で一辺の長さ 6.5 ～ 7.9 ｍの規模で掘られている。北西側に向かって近世以降の耕作などに伴う削平を受けており、南西壁の断面観察か

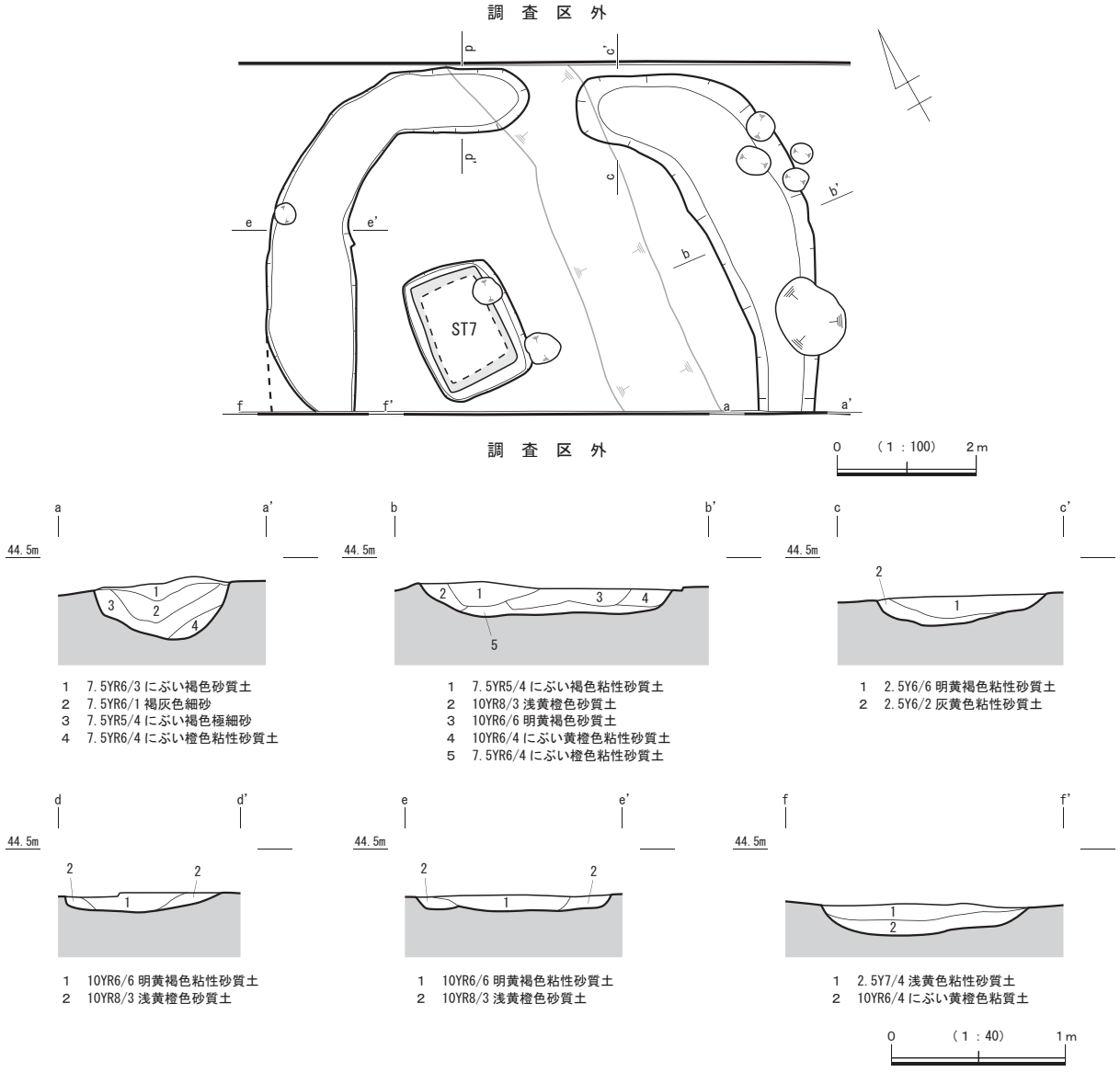


図 27　周溝墓（SZ）2

ら、東辺では地表下 40cm の地山面から掘り込まれているのに対して、西辺では地表下 60cm の地山面から掘り込まれている。また、北東辺のほぼ中央では、近世以降の水路によって周溝の一部が削平されている。南東辺の周溝は幅 0.8 ～ 1.5 m前後、深さ 30cm 前後で断面U字形をしていて、削平されながらも旧状を残存させているとみられる。一方、北西辺の周溝は幅 1.0 ～ 1.3 m前後､深さ 20cm 前後で断面皿状をしている。北東辺の周溝は幅 0.9 ～ 1.1 m前後､深さ 10cm 前後で、浅く周溝底部を残存させているに過ぎない。周溝に囲繞されている方形壇は、SZ 1 と同様に地山を削り出して成形している。なお、方形壇上面では、やや西寄りの位置において後述する木棺墓（ST 7）が検出されており、この周溝に伴う埋葬施設とみられる。

遺物は、西側の周溝底部から弥生土器が出土した。壺の体部片とみられるが、取り上げの時点ですでに細片化しており、整理作業でも接合などが困難であったため図化できなかった。遺物が少なく、詳細な時期決定は困難であるが、周溝墓は複数基が集中して墓域を形成することが一般的であることから、SZ 1 の弥生時代中期後半頃に近い時期と推定しておきたい。

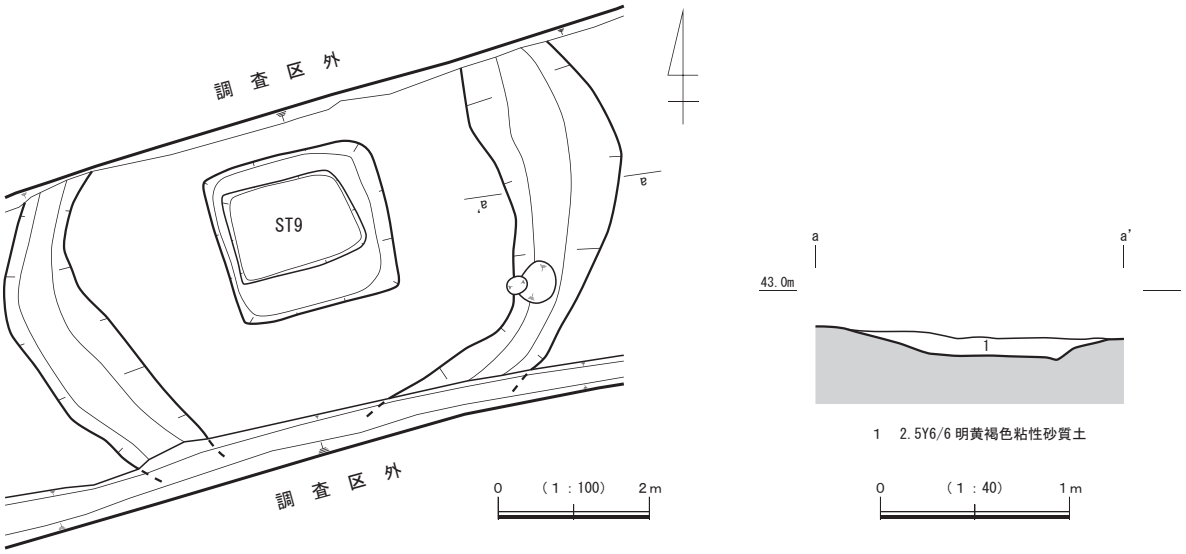


図 28 周溝墓（SZ）3

周溝墓（SZ）3（図 28、写真 14・49・65）

調査区２－２の南西側斜面寄りで検出した隅丸方形状にめぐる溝状遺構で、周溝墓に伴う溝とみられる。周溝の北側と南側は調査区外となるものの、全体を復原すると、周溝の外側からの測定で一辺の長さ 8.0 m前後、周溝に囲繞されている方形壇は一辺 6.0 m前後の規模と推定される。周溝は北東辺で幅 1.2 ～ 1.6 m前後、深さ 15cm 前後、北壁断面の西側隅部で幅 1.5 m前後、深さ 15cm 前後を計測し、いずれも断面形は皿状をしている。現状では、周溝に囲繞されている方形壇は、地山を削り出して成形している状況が認められる。なお、方形壇上面では、ほぼ中央において後述する木棺墓（ST 9）が検出されており、この周溝に伴う埋葬施設とみられる。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、SZ 1 から続く墓域の広がりと考えられることから、SZ 1 と同じ弥生時代中期後半頃と推定しておきたい。

木棺墓（ST）1（図 29、写真 50・51）

調査区２－１の東部南東壁沿いにおいて検出した木棺墓である。長さ約 2.6 m、幅 1.4 m以上、深さ 25cm 前後の長方形墓壙中央に長さ 2.1 m、幅 1.1 m以上の木棺痕跡が残る。掘方の平面形をみると、南側の幅がやや広くなっており、台形状を呈している。平面及び土層断面から棺材の痕跡が確認でき、厚さ３～８cm の床板に、厚さ６～ 14cm の小口板と側板を組み込む組み合わせの木棺とみられる。木棺の内法は長辺で約 1.9 m、短辺で 0.7 m以上、高さ７～ 14cm を残している。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、後述する ST 2 から続く墓域の広がりと考えられることから、弥生時代中期後半頃と推定しておきたい。

木棺墓（ST）2（図 30・31、写真 15・16・52 ～ 55・70）

SZ 1 内の北東辺やや南東寄りで検出した木棺墓で、墓壙は SZ 1 方形壇裾を掘り込んで造られており、また南隅は後述の ST 3 の墓壙を切っている。墓壙の長さは約 2.5 m、幅は南東側で 1.5 m前後、北西側で 1.0 m前後を計測する。深さは SZ 1 の周溝底面から 20cm 前後を測るが、本来はより高い位置から SZ 1 の埋土を切って設営されたものと考えられる。木棺の痕跡は、

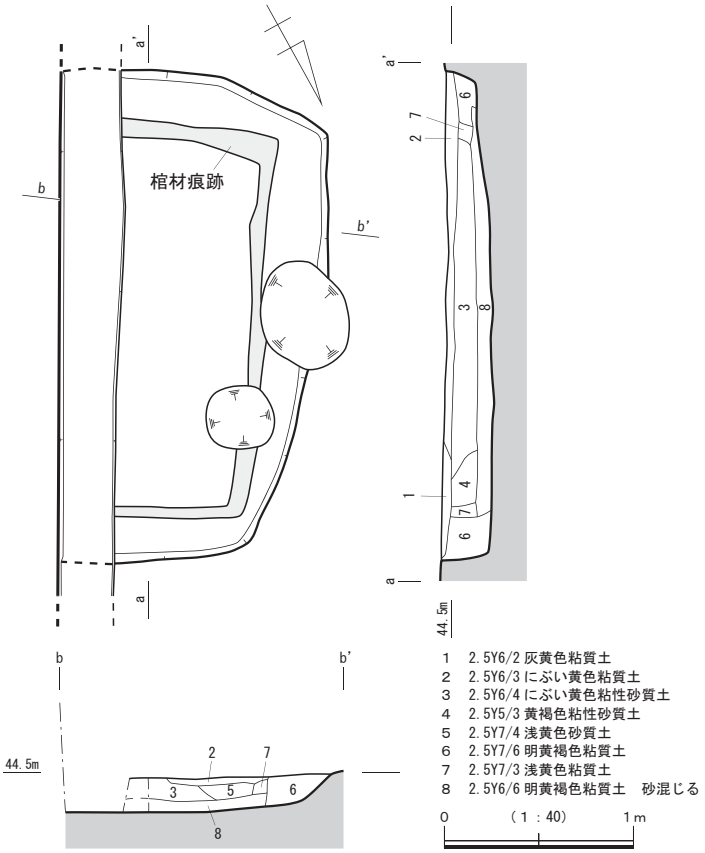


図 29　木棺墓（ST）1

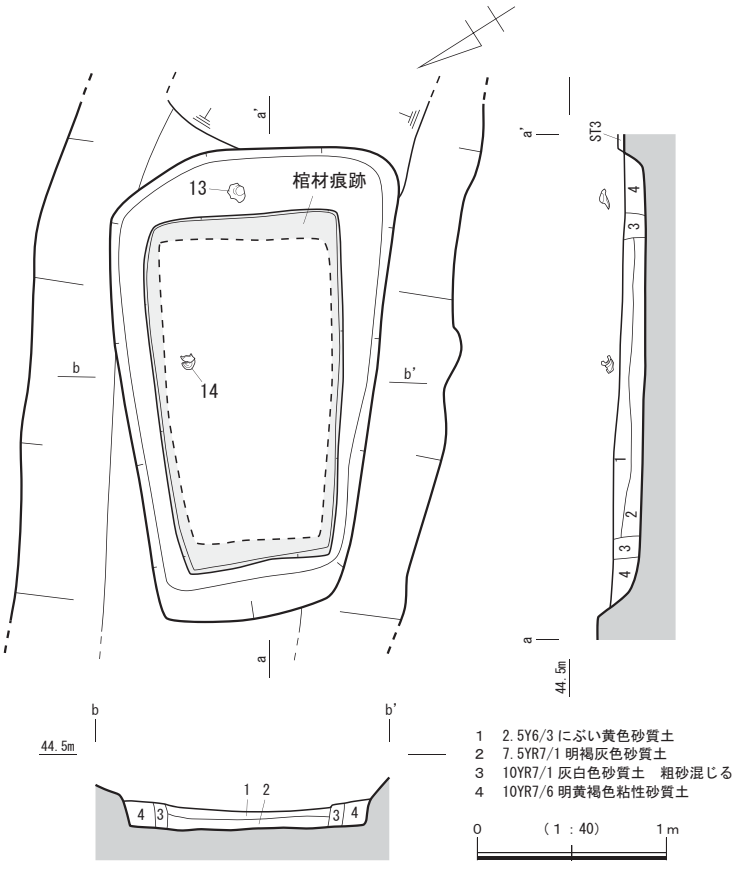


図 30　木棺墓（ST）2

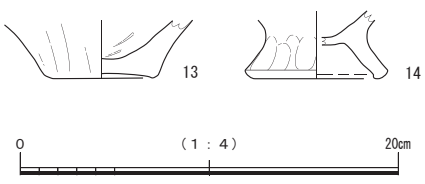


図 31　木棺墓（ST）2 出土遺物

墓壙の中央部で検出し、長さ約 1.8 m、幅は南東側で 1.0 m前後、北西側で 0.8 m前後、深さは 15cm 前後を計測する。土層観察から、厚さ 6 ～ 12cm の側板と小口板が棺材に用いられたとみられるが、底板は確認できなかった。

遺物は、墓壙埋土内とみられる南東側、棺底より約 20cm 上で弥生土器甕もしくは壺の底部片（13）が出土したほか、木棺埋土内とみられる位置において棺底より約 18cm 上で弥生土器脚部片（14）が出土した。13 は、弥生土器甕もしく壺の底部片である。14 は、弥生土器脚部片で、外面にはユビオサエが明瞭に残っている。これらの出土遺物から、ST 2 の時期は弥生時代中期後半頃と推定される。また、SZ 1 方形壇裾を掘り込んで墓壙が造られていることから、SZ 1 の築造後に設営されたものと考えられる。

木棺墓（ST）3（図 32、写真 54・56）

SZ 1 内で ST 2 の南東側において検出した木棺墓である。墓壙は ST 2 と同様、SZ 1 の周溝法面を掘り込んいるが、北西隅は ST 2 に切られている。棺材痕跡は確認されなかったが、土層断面観察から木棺墓と判断した。墓壙の長さは約 2.8 m、幅は北側で 1.3 m前後、南側で 1.0 m前後を測る。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、墓壙の切り合い関係から、SZ 1 の築造後、ST 2 に先行して設営された木棺墓とみられ、弥生時代中期後半頃と推定される。

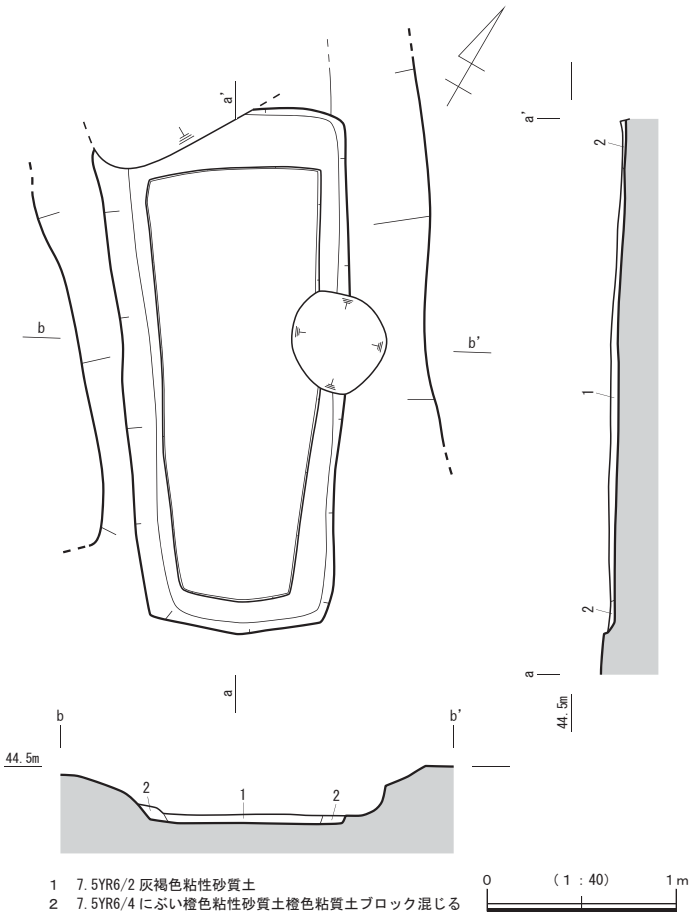


図 32　木棺墓（ST）3

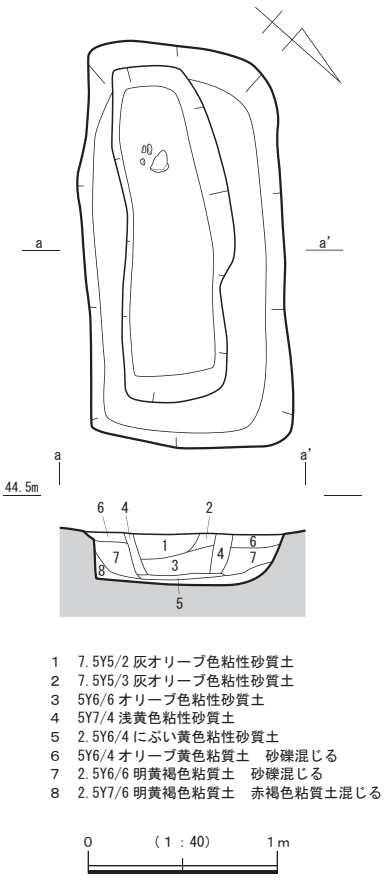


図 33　木棺墓（ST）4

木棺墓（ST）４（図 33、写真 57・58）

SZ １の北西辺内において検出した木棺墓で、ST ２・３と同様、墓壙は SZ １周溝法面を掘り込んでいる。墓壙の長さは約 2.1 m、幅は北東側で 1.1 m前後、南西側で 1.0 m前後を計測し、ほぼ長方形である。深さは 27cm 前後を残している。木棺の痕跡は墓壙のやや南西寄りで検出し、南西側の小口は墓壙掘方に沿って検出した。棺の長さは約 1.8 m、幅は北東側で 0.55 m前後、南西側で 0.4 m前後､深さは 25cm 前後を計測する。平面的に棺材の痕跡は確認できなかったものの、土層断面の観察から、厚さ５～ 10cm の側板と、厚さ３cm 前後の底板が用いられたとみられる。

なお、どのような性格をもつものか不明であるが、木棺南寄りの棺上とみられる位置において 15cm 前後の円礫と５cm 前後の円礫がややまとまって検出されている。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、SZ １の周溝内に設営されたほかの木棺墓と同じ弥生時代中期後半頃の可能性が考えられる。

木棺墓（ST）５（図 34、写真 59・60）

調査区２－１の中央やや北西寄り、調査区北東壁に接して検出した木棺墓である。南東側は SI ２によって削平を被っているものの、墓壙と木棺の基底部は残存していた。墓壙の長さは約 2.4 m、幅は北東側で 1.7 m前後、南西側で 1.4 m前後を計測し、深さ 20cm 前後を残している。木棺は墓壙のやや南東寄りに置かれており、長さ約 2.0 m、幅は北東側で 1.0 m前後、南西側で 0.9 m前後、深さ 13cm 前後を計測する。土層断面の観察から、小口板と側板には厚さ６cm 前後、底板には厚さ３cm 前後の棺材が用いられたとみられる。また、長軸方向の墓壙壁際において、墓壙埋土とは異なる厚さ７cm 前後の木材痕を確認しており、墓壙長軸方向壁際に木材を据え置いていた可能性があると考えられるが、その性格は明らかにし得なかった。

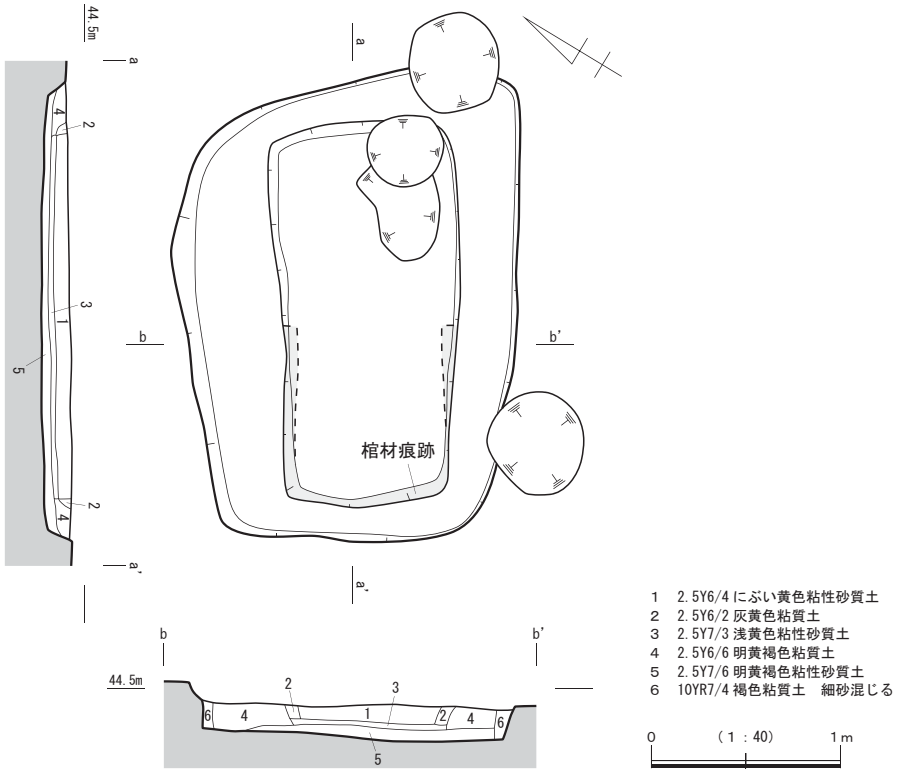


図 34　木棺墓（ST）５

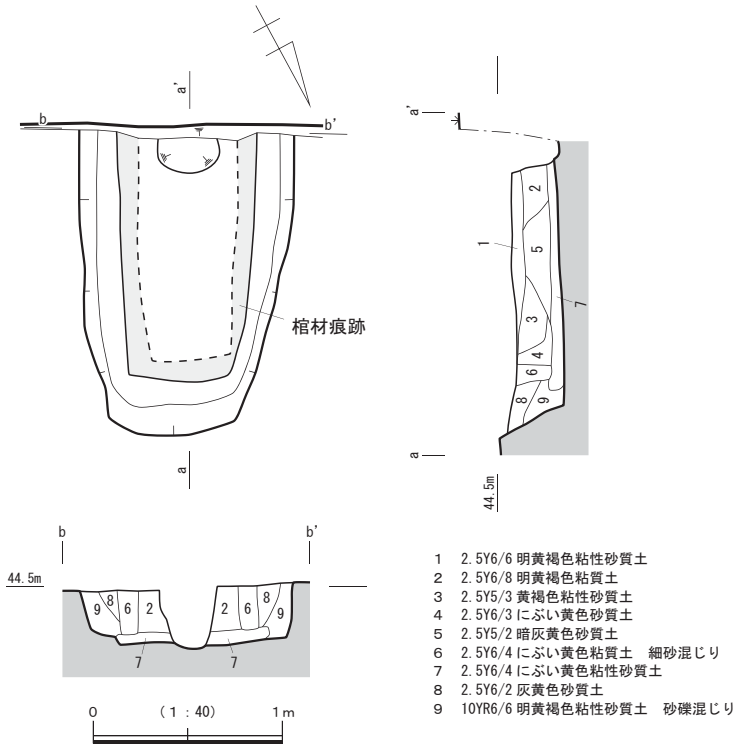


図 35　木棺墓（ST）6

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、SI 1 に切られていることや、ST 2から続く墓域の広がりと考えられることから、前述の ST 2などと同じ弥生時代中期後半頃と想定しておきたい。

木棺墓（ST）6（図 35、写真 61・62）

調査区２－１の中央やや北西寄り、調査区南西壁沿いで検出した木棺墓であり、その南西側は調査区外となっている。また、調査区南西壁沿いでは他のピットによって損壊を被っている。墓壙の長さは 1.6 m以上、幅は調査区壁沿いの南西側で 1.1 m前後、北東側で 0.8 m前後、深さは 32cm 前後を残している。木棺の痕跡は墓壙の中央で検出し、その長さは 1.3 m以上、幅は南西側で 0.7 m前後、北東側で 0.6 m前後を計測する。土層断面の観察から、小口板と側板に 11cm 前後、底板には 6 cm 前後の棺材が用いられたとみられる。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、ST 2から続く墓域の広がりと考えられることから、前述の ST 2などと同じ弥生時代中期後半頃と推定しておきたい。

木棺墓（ST）7（図 36、写真 63・64）

SZ 2方形壇内のやや西寄りの位置において検出した木棺墓で、SZ 2の埋葬施設とみられる。墓壙の長さは約 1.9 m、幅は南側で 1.4 m前後、北側で 1.3 m前後を計測し、深さは 25cm 前後を残している。木棺の痕跡は、墓壙の中央において検出され、棺の長さは約 1.6 m、幅は南側で 1.1 m前後、北側で 1.0 m前後、深さ 20cm 前後を計測する。土層断面の観察から、厚さ５～15cm の小口板、厚さ７cm 前後の側板、厚さ５cm 前後の底板が組み合わされて棺を構成していたとみられる。

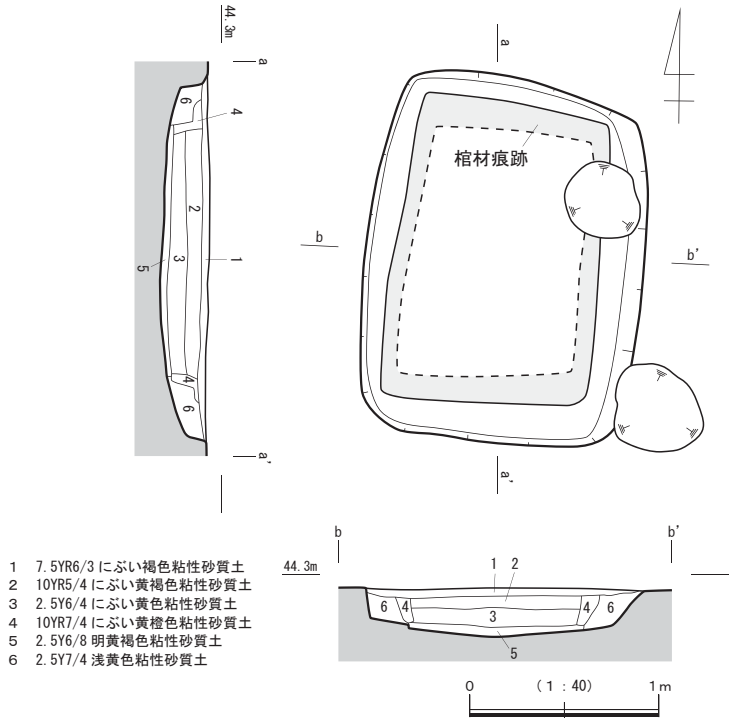


図 36　木棺墓（ST）7

遺物は、周辺精査中にサヌカイト小片が出土しているが、ST 7に直接伴うものかは不明である。このほかには遺物が出土していないため、詳細な時期決定は困難であるが、SZ 2の埋葬施設とみられることから、SZ 2と同じ弥生時代中期後半頃と推定しておきたい。

木棺墓（ST）8（図 37、写真 65・66）

調査区２－２において検出されたSZ 3の東側で検出した木棺墓である。墓壙の長さは約 2.0 m、幅は南東側で 1.3 m前後、北西側で 1.1 m前後を測り、深さは 22cm 前後を残している。墓壙の平面形は長方形で、断面形状は逆台形をしている。木棺の痕跡は、墓壙のやや南西寄りで検出され、棺の長さ約 1.5 m、幅約 0.7 mを計測する。平面及び土層断面の観察から、厚さ 10cm 前後の小口板と側板、厚さ５cm 前後の底板が棺材に用いられたとみられる。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、ST 2から続く墓域の広がりと考えられることから、前述の ST 2などと同じ弥生時代中期後半頃と推定しておきたい。

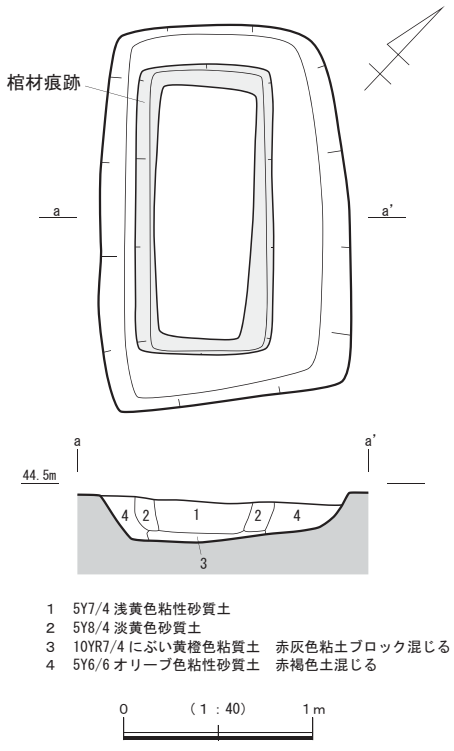


図 37　木棺墓（ST）8

木棺墓（ST）９（図 38、写真 65・67）

SZ ３方形壇内のほぼ中央において検出した木棺墓で、SZ ３の埋葬施設とみられる。棺材痕跡は確認されなかったが、土層断面の観察から木棺墓と判断した。墓壙の長さは約 2.3 m、幅は約 2.1 mを計測し、深さは 16cm 前後を残している。

遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが、SZ ３の埋葬施設とみられることから、SZ ３と同じ弥生時代中期後半頃と推定しておきたい。

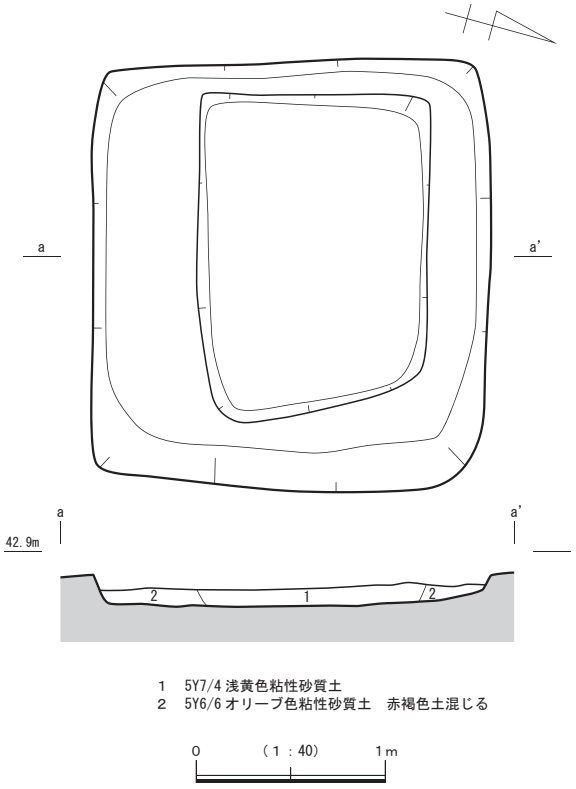


図 38　木棺墓（ST）９

遺物包含層等出土遺物（図 39、写真 70）

遺物包含層等からは、調査区１と同様、弥生時代から近世にかけての遺物が僅かに出土した。ただ、いずれも小片であったため、ここでは図化可能であった５点の遺物について報告する。

15 は、弥生土器甕の底部片で、外面にはタタキがみられる。16 は、須恵器杯の底部片で、回転ヘラケズリ後に高台を貼り付けている。17 は、いわゆる東播系須恵器の鉢の口縁部である。18 は、備前産陶器の壺の肩部片とみられる。19 は、近世の国産陶器の壺で、肩部に耳をつけ、その近くに穿孔を３孔施している。

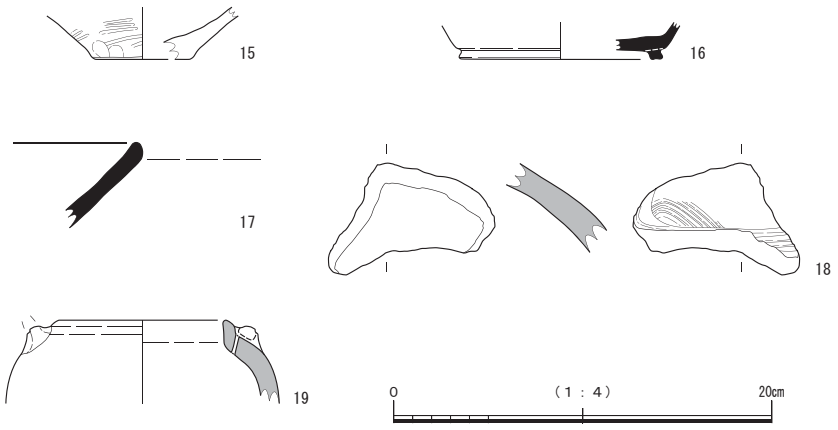


図 39　調査区２包含層等出土遺物

表２　遺物観察表

報告No.	出土位置	種別	器種	法量（cm）			所見
				口径	器高	底径	
1	SB 1 （SP 2）	弥生土器	底部	-	＞2.5	5.35	内面：ナデ後ユビオサエ 外面：ナデ
2	SP 1	須恵器	椀	-	＞1.9	-	口縁部のみ 内外面ともに回転ナデ　口縁端部に重ね焼き痕跡あり
3	SP 2	須恵器	椀	-	＞1.3	-	口縁部のみ 内外面ともに回転ナデ　口縁端部に重ね焼き痕跡あり
4	調査区1 包含層等	弥生土器	底部	-	＞3.15	＊5.6	内面：磨滅により調整不明 外面：タタキ
5	調査区1 包含層等	須恵器	椀	-	＞1.05	＊6.6	底部のみ 内外面ともに回転ナデ　底部回転糸切り
6	調査区1 包含層等	須恵器	椀	-	＞1.5	＊5.55	内外面ともに回転ナデ　底部回転糸切り
7	調査区1 包含層等	須恵器	椀	-	＞1.3	＊6.4	内外面ともに回転ナデ　底部回転糸切り
8	調査区1 包含層等	須恵器	椀	-	＞1.3	＊5.5	内外面ともに回転ナデ　底部調整不明
9	調査区1 包含層等	須恵器	鉢	-	＞3.15	-	口縁部のみ 内外面ともに回転ナデ　口縁端部に自然釉付着
10	調査区1 包含層等	白磁	紅皿	＊6.05	1.8	＊2.45	内外面ともに白磁釉施釉 外面：型押しによる蛸唐草文
11	SZ 1 周溝上層	弥生土器	底部	-	＞2.2	＊11.6	内面：磨滅により調整不明 外面：ナデ？
12	SZ 1 周溝	弥生土器	壺	長さ ＞4.5	幅 ＞4.8	厚さ 0.65	内面：ナデ？ 外面：タテハケ後、櫛描直線文・波状文
13	ST 2 墓壙	弥生土器	底部	-	＞3.1	6.0	内面：ナデ　工具痕あり 外面：ナデ後、ミガキ
14	ST 2 棺上面	弥生土器	脚部	-	＞3.6	＊7.6	体部：内面ユビナデ or ユビオサエ 脚部：内外面ともにナデ、外面はナデ後、ユビオサエ
15	調査区2 包含層等	弥生土器	甕	-	＞2.3	＊5.35	内面：ナデ？ 外面：タタキ後、底部ユビオサエ
16	調査区2 包含層等	須恵器	杯	-	＞1.95	＊10.75	内外面ともに回転ナデ　底部回転ヘラケズリ後、高台貼付け
17	調査区2 包含層等	須恵器	鉢	-	＞4.55	-	内外面ともに回転ナデ後、不定方向ナデ　口縁端部に重ね焼き痕跡あり
18	調査区2 包含層等	陶器	壺	長さ ＞5.9	幅 ＞8.75	厚さ 1.45	内面：回転ナデ 外面：櫛描波状文　自然釉？付着
19	調査区2 包含層等	陶器	壺	＊8.8	＞4.4	-	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ　頸部付近に３孔穿孔　耳貼付け　施釉

計測値における「＊」は復元値、「＞」は残存値を示す。

第Ⅲ章　総括

今回の片山遺跡の発掘調査は、雁戸井地区ほ場整備事業の水路工事によって遺跡が破壊される約586㎡の範囲において実施した。調査の結果、主要な遺構として、竪穴建物２棟、掘立柱建物７棟、周溝墓３基、木棺墓９基が検出されたほか、多数のピットなどが確認された。その一方で、遺物はほとんど出土しておらず、弥生時代から近世にかけての遺物が少量出土したに過ぎなかった。

このため、出土遺物から時期を決定できる遺構はほとんど存在していないが、僅かながら遺物が出土した遺構については、弥生時代中期後半、弥生時代後期後半、平安時代後期から鎌倉時代にかけての３時期に区分することが可能である。

以下では、今回調査で検出された主要遺構を主な検討対象として、各時期における遺構分布を概観し、片山遺跡の集落変遷について述べ、本書のまとめとしたい。なお、主要遺構のうち、詳細な時期を決定し得なかった竪穴建物２棟については検討の対象外とした。

弥生時代中期後半（図 40）

周溝墓３基（SZ １～３）、木棺墓９基（ST １～９）が当該期に属するとみられ、ST ２～４はSZ １の周溝内埋葬施設、ST ７はSZ ２の埋葬施設、ST ９はSZ ３の埋葬施設と考えられる。このうち、出土遺物から時期を検討することができたのはSZ １とST ２のみであり、そのほかの遺構については、切り合い関係や遺構の種別から同時期頃の遺構と判断した。ただ、ST ２とST ３の切り合い関係にみられるように、これらの遺構には若干の時期差が存在していたことが考えられる。しかし、今回の調査ではこの時期差については明らかにできなかった。

遺構についてみると、周溝墓は、その規模に差がみられるものの、いずれも方形を指向した方形周溝墓といえる。木棺墓については、ST ５のようにほかの木棺墓とは異なる構造をもつものの存在が窺える一方で、棺材痕跡が確認されたものをみると、その埋葬にあたっては、基本的に底板上に小口板・側板を組み合わせる木棺を用いたものとみられ、埋葬手法に一定の類似性が認められる。

これらの遺構は、片山遺跡が所在する段丘南西側の比較的狭い範囲でまとまって検出されており、弥生時代中期後半頃にひとつの墓域を形成していたものとみられる。しかし、現在のところ、当該期における竪穴建物などの遺構は確認されておらず、被葬者の居住域については明らかではない。

弥生時代後期後半（図 41）

掘立柱建物２棟（SB １・２）が当該期に属すると考えられる。出土遺物は極めて限定的であったが、建物を構成する柱穴から出土した遺物から、SB １の時期を弥生時代後期後半頃と推定し、SB ２については形態や建物方位の類似性から、SB １と同時期頃の遺構と判断した。

掘立柱建物はいずれも総柱建物で、倉庫状の建物であった可能性がある。しかし、具体的な建物の機能については今回の調査では明らかにできていない。

今回調査において、当該期の遺構・遺物は、上記以外のものはほとんど確認されていないものの、調査区１の北隣で実施された県教委の調査において、弥生時代後期末から古墳時代初頭頃の竪穴建物が３棟検出されている（まち技 2019）。この県教委の調査で検出された竪穴建物は、SB １・２と若干時期を異にしているものの、現状では、弥生時代後期後半以降に居住域としての集落が形成され始めたといえるであろう。

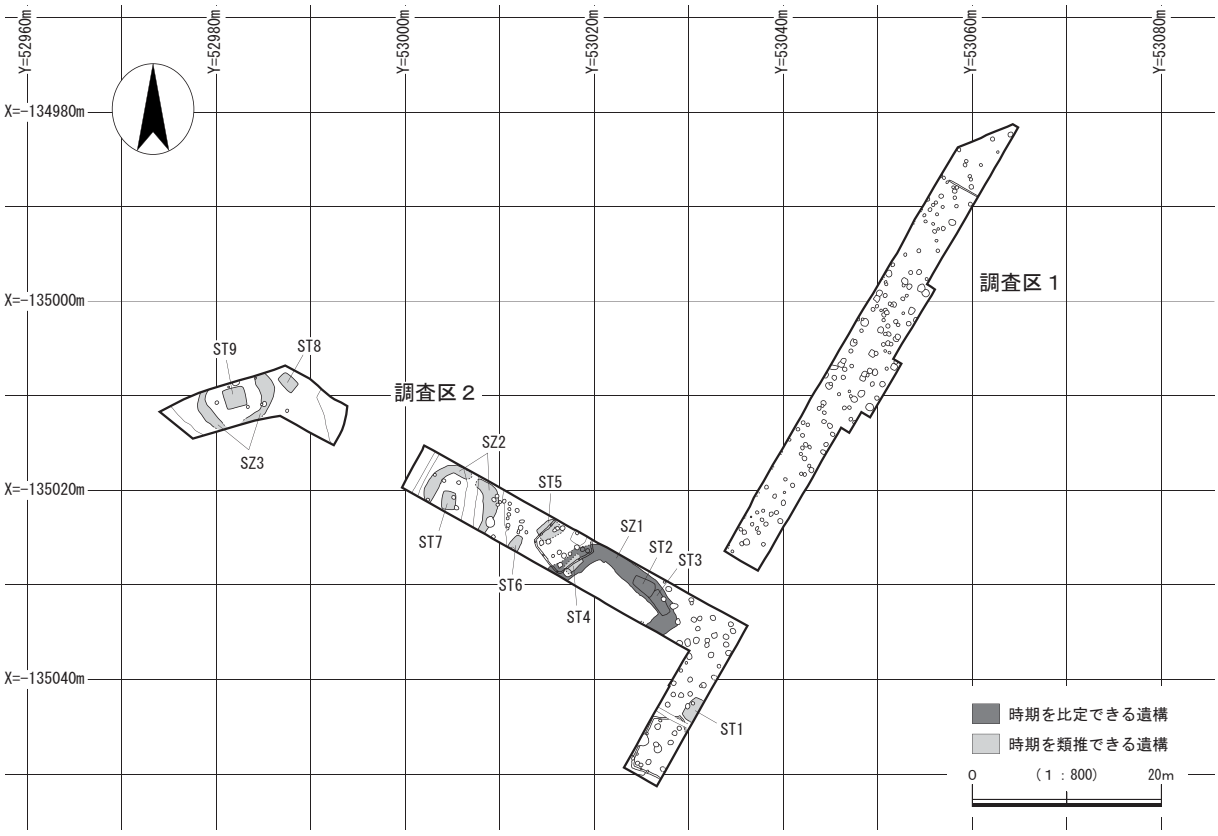


図 40　遺構変遷図 (弥生時代中期後半)

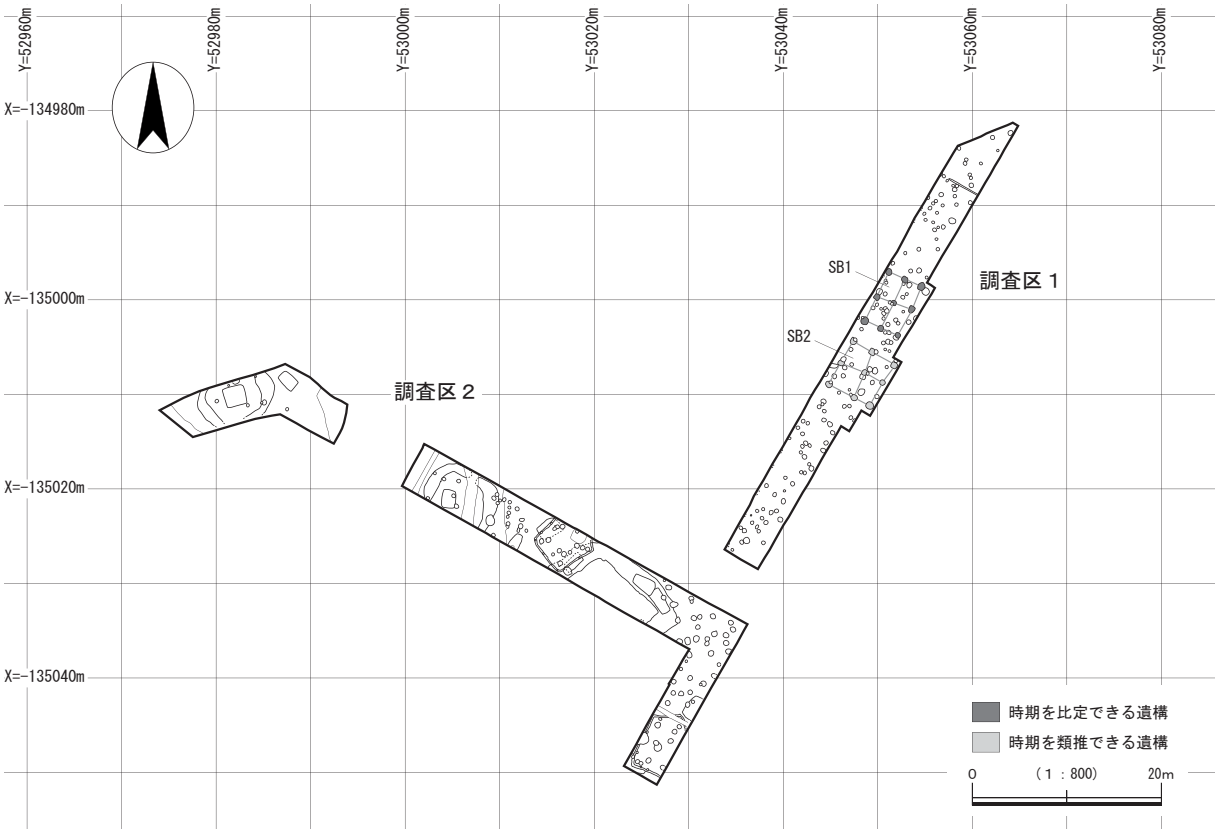


図 41　遺構変遷図 (弥生時代後期後半)

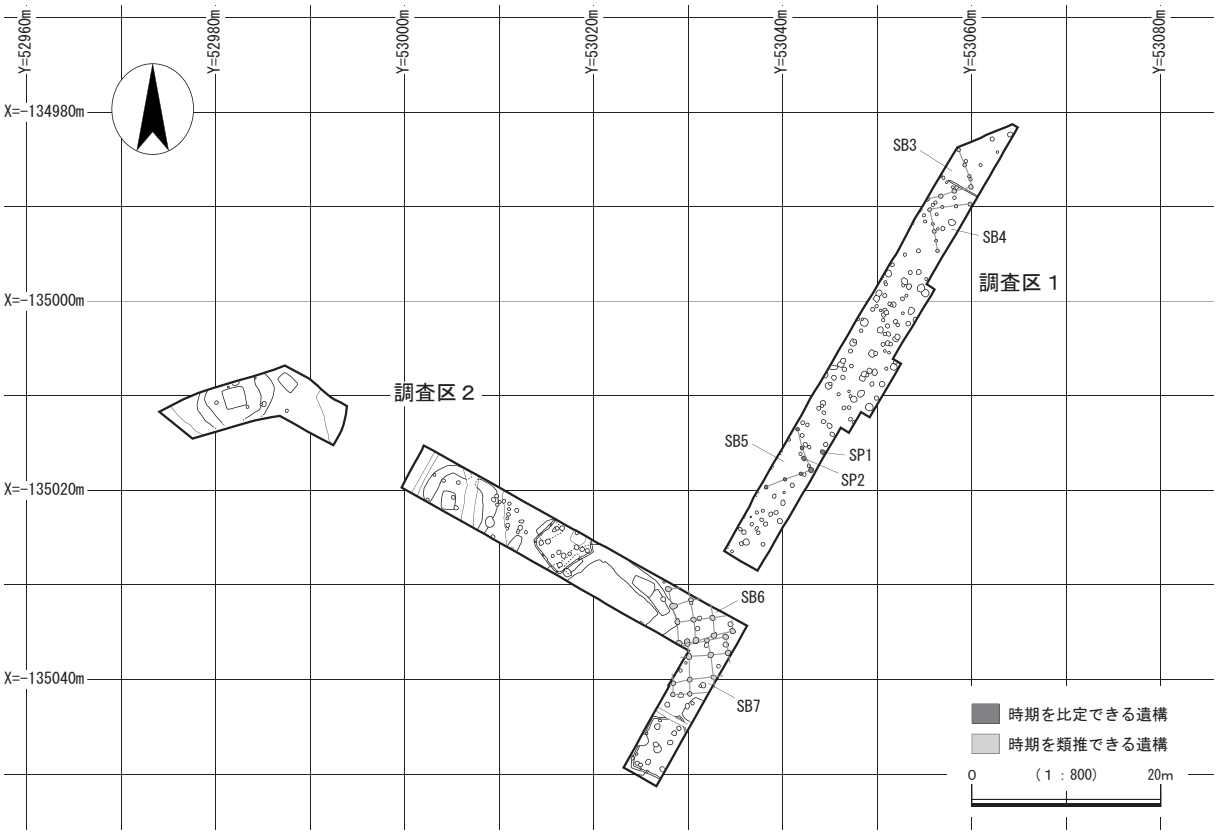


図 42　遺構変遷図 (平安時代後期～鎌倉時代)

平安時代後期から鎌倉時代（図 42）

掘立柱建物５棟（SB ３～７）及びピット２基（SP １・２）が当該期に属すると考えられる。直接遺構に伴う出土遺物がほとんどないため、いずれの遺構も時期比定は困難であるが、SB ５出土遺物や周辺のピット出土遺物、建物の形態や方位から、これらの掘立柱建物の時期を平安時代後期から鎌倉時代と判断した。

建物の構造をみると、側柱建物のものと総柱建物のものがあり、側柱建物は調査区１で、総柱建物は調査区２でのみ検出されており、構造の異なる建物によってその分布がまとまる傾向がみられる。同時期の遺構という前提ではあるが、このように構造の異なる建物によって分布に差異がみられる背景には、例えば生活スペースとしての建物、倉庫状の建物といった機能差をもつ建物を計画的に構築していたと想定することも可能であろう。しかし、現状では、今回検出された各掘立柱建物の具体的な機能を明らかにできていないため、機能の異なる建物が併行して構築されていた可能性を指摘するにとどめておきたい。

また、調査区１の北隣で実施された県教委の調査においても、平安時代後期頃の掘立柱建物などが複数棟確認されており、平安時代後期以降、一定規模の集落が営まれるようになったと考えられる。

以上のことを踏まえて片山遺跡における集落変遷をみると、まず弥生時代中期後半頃に段丘南西側において方形周溝墓と木棺墓から構成される墓域が形成される。しかし、墓域の形成は中期後半のみで途絶え、後期前半には続かない。その後、後期後半から古墳時代初頭に掘立柱建物からなる居住域が一時的に形成されるが、その存続期間はそれほど長くなく、これ以降、平安時代後期頃まで顕著な遺構・遺物はほとんど確認されなくなる。ただ、平面五角形の竪穴建物のように、この間の時期に構

築された可能性のある遺構もあり、注意が必要である。平安時代後期頃になると、複数棟の掘立柱建物などが構築されるようになり、鎌倉時代にかけて一定規模の集落が営まれていたとみられる。

これらのことから、片山遺跡は、加古台地の北側縁辺部に断続的に営まれた比較的小規模な集落といえる。周辺遺跡との関係など、本書では十分に検討できていない点も多々あるが、これまで遺跡の存在が知られていなかった場所において、弥生時代の墓域や同時代から中世にかけての居住域が確認されたことは、今後周辺地域の歴史を考えるうえで貴重な成果が得られたといえよう。

参考文献

（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　2018『平成 29 年度埋蔵文化財調査年報』兵庫県立考古博物館

（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　2019『平成 30 年度埋蔵文化財調査年報』兵庫県立考古博物館

図　　版

写真 17　調査区 1 全景（北東から）

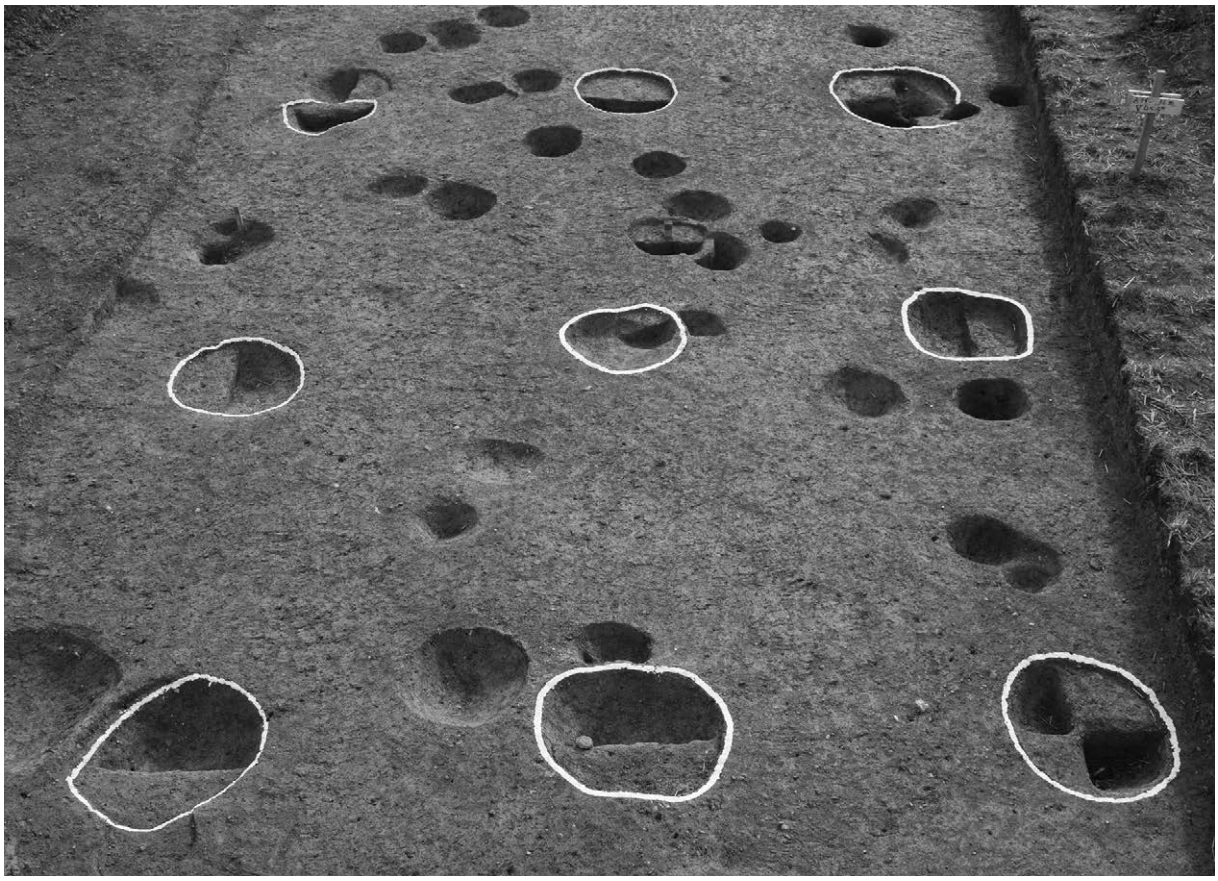


写真 18　SB 1（北東から）

図版２

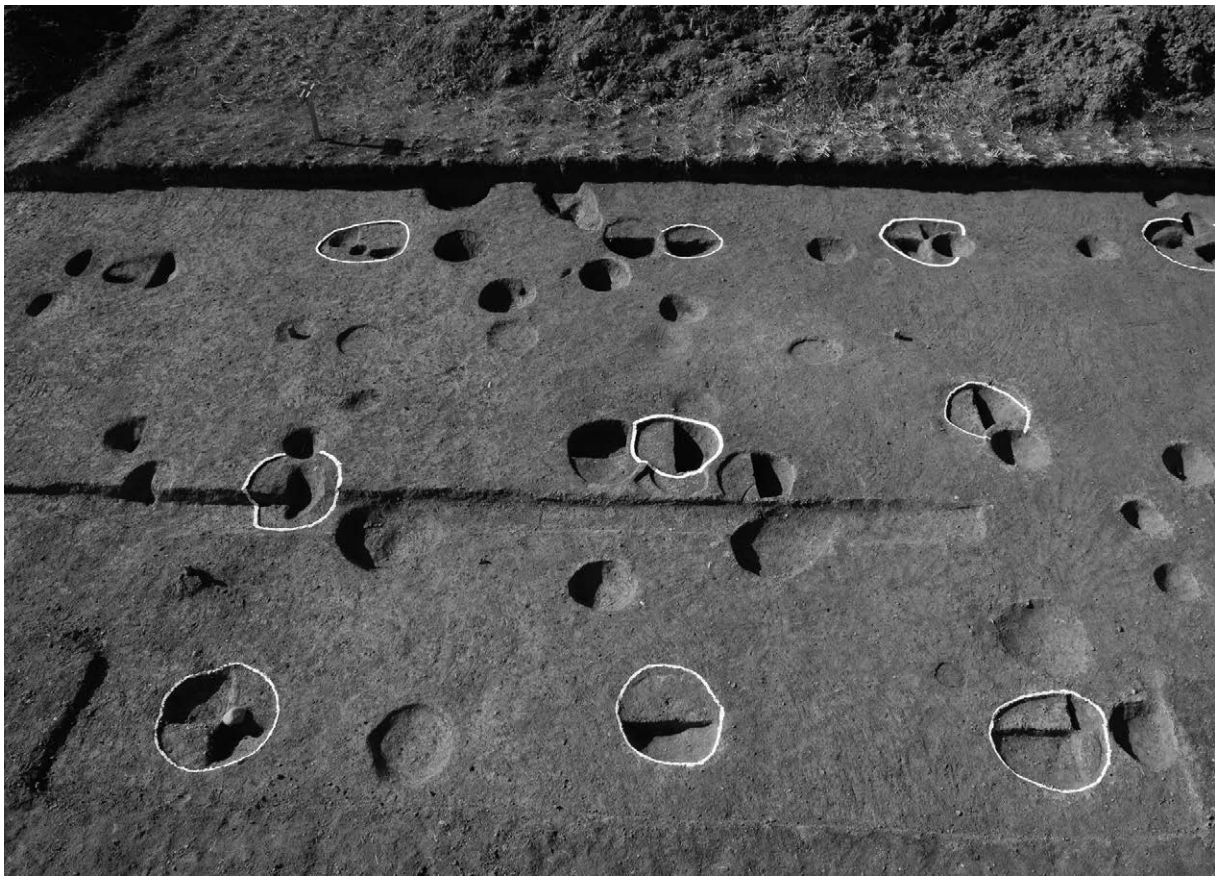


写真 19　SB ２（南東から）

写真 20　SB １（SP ２）土層断面（南西から）

写真 21　SB ２（SP ５）土層断面（北から）

写真 22　SB ３・４（南から）

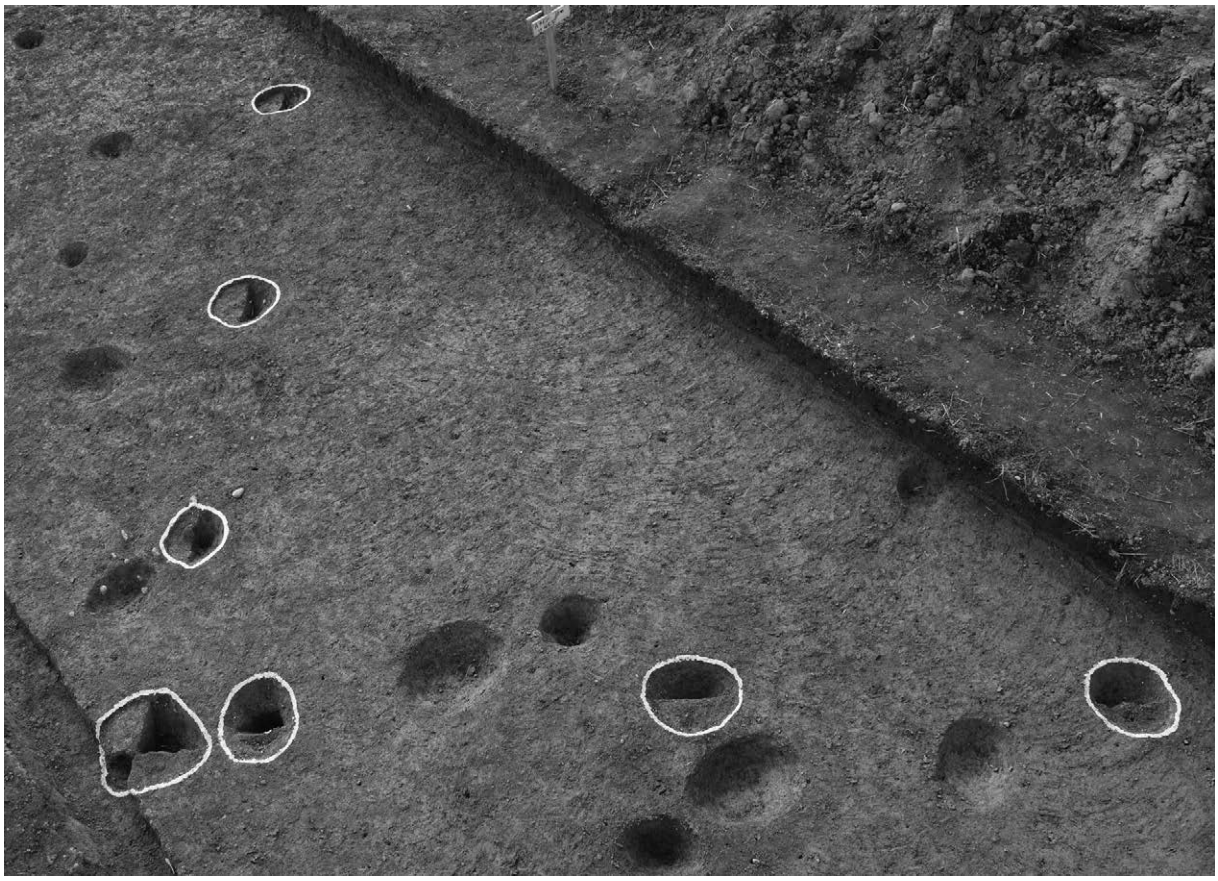


写真 23　SB 5（東から）

写真 24　SB 5（SP 3）土層断面（北西から）

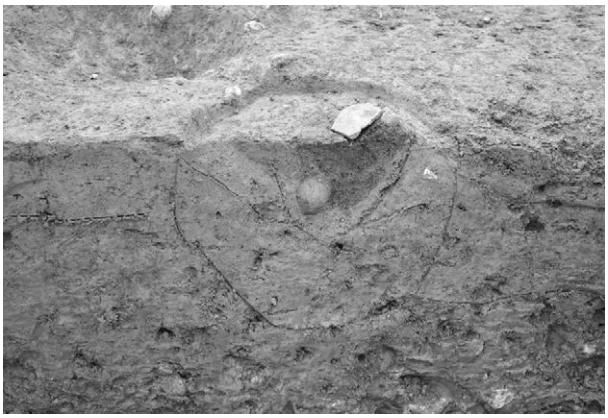


写真 25　SB 5（SP 4）土層断面（北から）

写真 26　SP 1 土層断面（南西から）

写真 27　調査区 1 土層断面（北東から）

図版 4

写真 28　調査区２－１（第１面）全景（南東から）

写真 29　SI 1（北から）

写真 30　SI 1 土層断面（南西から）

写真 31　SI 1 南西側周壁溝土層断面（北西から）

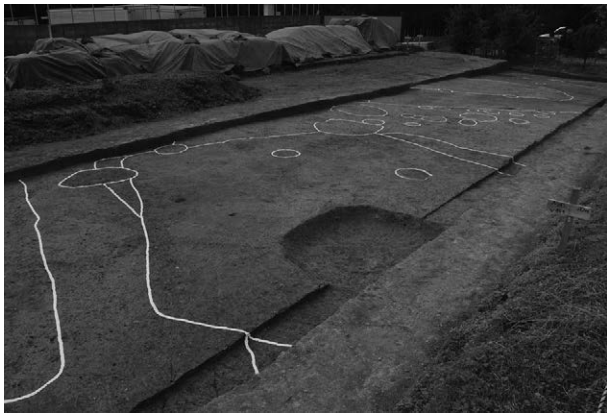


写真 32　SI 2 検出状況（東から）

写真 33　SI 2 土層断面（西から）

写真 34　SI 2 北西側周壁溝土層断面（南から）

写真 35　SI 2 南西側周壁溝土層断面（北から）

写真 36　SI 2（SP 3）土層断面（北東から）

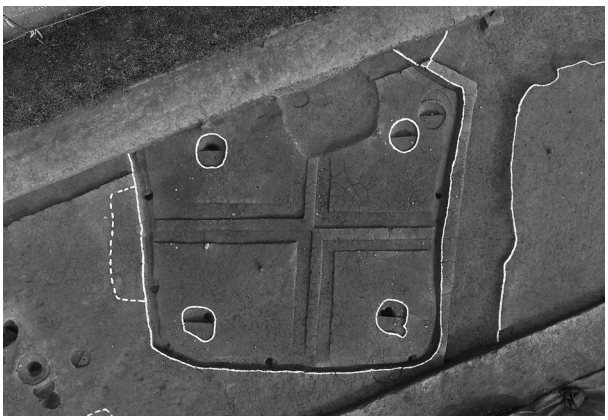


写真 37　SI 2（下が南西）

図版６

写真 38　SB 6①（南から）

写真 39　SB 6②（南東から）

写真 40　SB 6（SP 8）土層断面（西から）

写真 41　SB 7（北から）

写真 42　SB 7（SP 1）土層断面（北から）

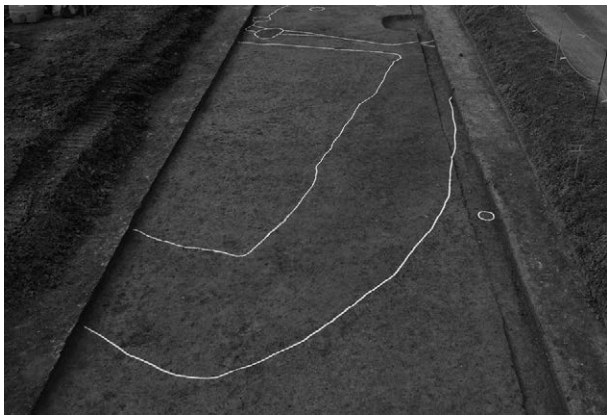


写真 43　SZ 1 検出状況（南東から）

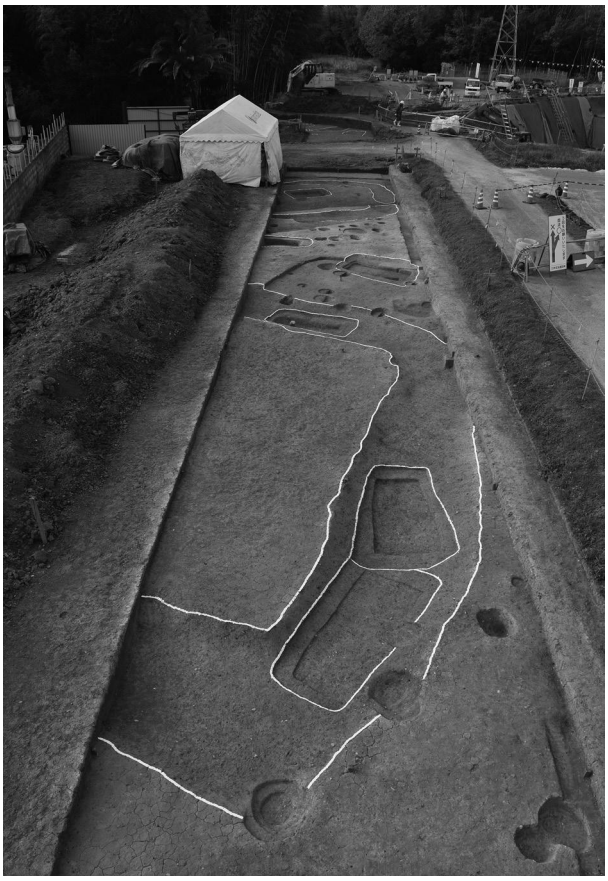


写真 45　SZ 1 （南東から）

写真 44　SZ 1 周溝（b-b ´）土層断面（南東から）

写真 46　SZ 2 周溝（b-b ´）土層断面（南から）

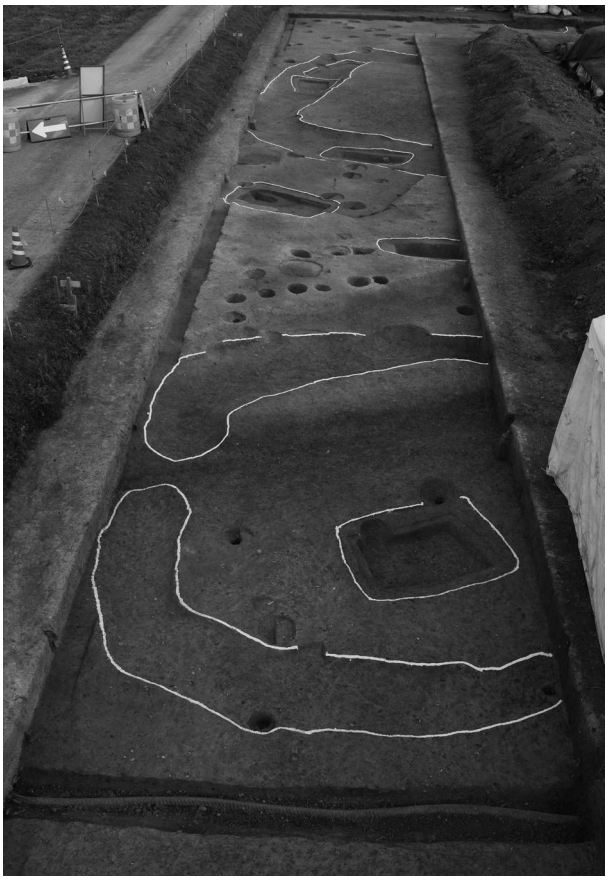


写真 48　SZ 2 （北西から）

写真 47　SZ 2 周溝（d-d ´）土層断面（北西から）

図版８

写真 49　SZ 3（東から）

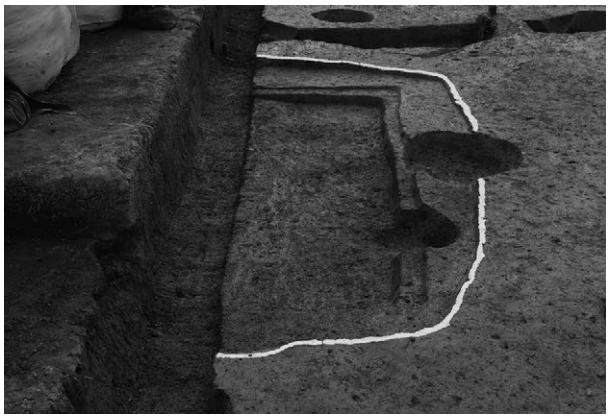


写真 50　ST 1（北東から）

写真 51　ST 1 土層断面（北西から）

写真 52　ST 2 検出状況（西から）

写真 53　ST 2 弥生土器出土状況（北から）

写真 54　ST 2・3（北西から）

写真 55　ST 2土層断面（北から）

写真 56　ST 3土層断面（東から）

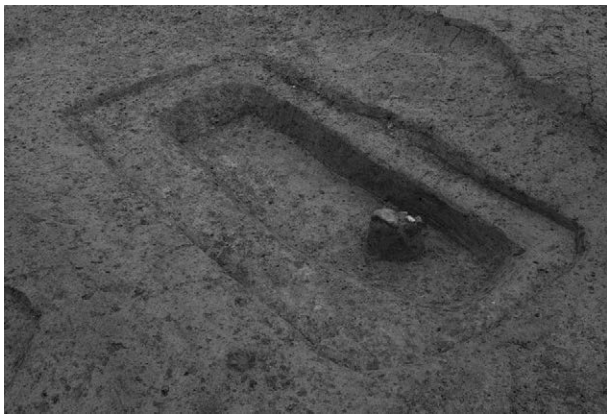


写真 57　ST 4（西から）

写真 58　ST 4土層断面（北東から）

写真 59　ST 5（南西から）

写真 60　ST 5墓壙土層断面（南西から）

図版 10

写真 61　ST 6（北から）

写真 62　ST 6土層断面（西から）

写真 63　ST 7検出状況（北から）

写真 64　ST 7（南東から）

写真 65　SZ 3、ST 8・9（写真下が南東）

写真 66　ST 8（東から）

写真 67　ST 9土層断面（東から）

写真 68　調査区２－１土層断面（北東から）

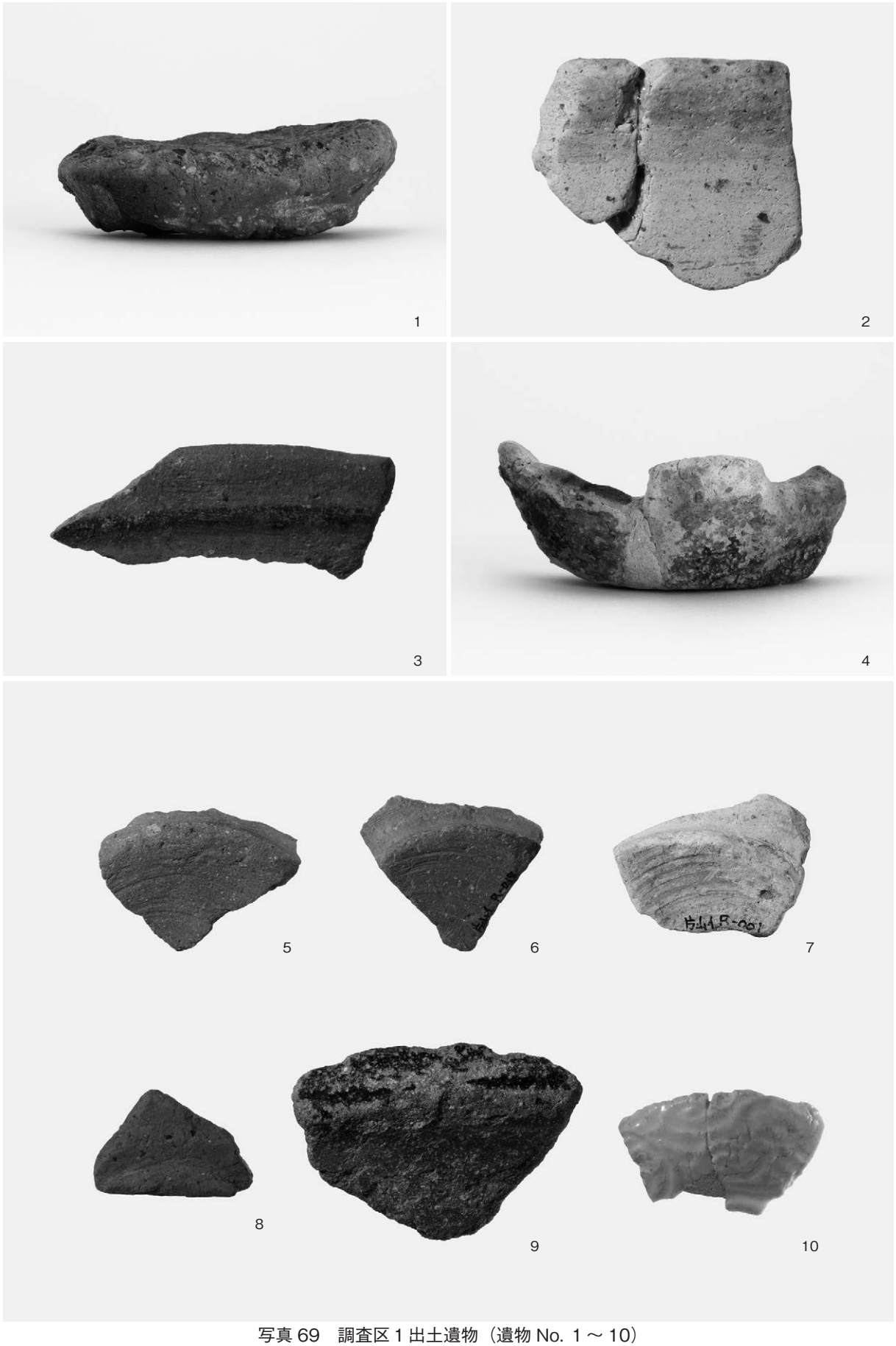


写真 69　調査区 1 出土遺物（遺物 No. 1 ～ 10）

図版 12

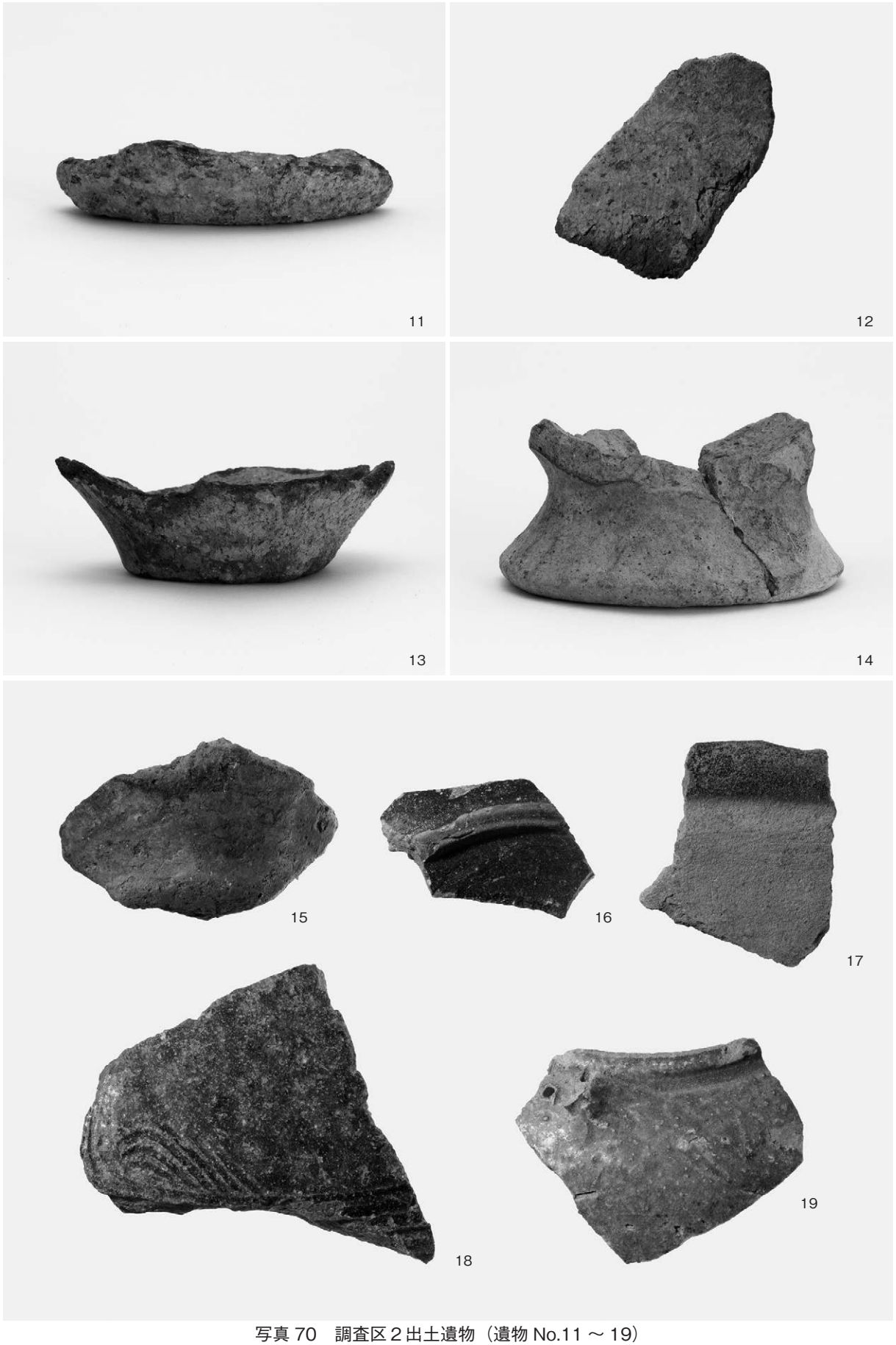


写真 70　調査区２出土遺物（遺物 No.11 ～ 19）

報　告　書　抄　録

ふりがな	かたやまいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	片山遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	加古川市文化財調査報告
シリーズ番号	34
編 著 者 名	平尾英希（編）、西岡巧次
編 集 機 関	加古川市教育委員会
所 在 地	〒675-0101　兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7
発行年月日	令和３（2021）年３月 19 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
かたやまいせき 片山遺跡	ひょうごけんかこがわし 兵庫県加古川市 やはたちょうしもむら 八幡町下村	28210	110644	34° 46′ 54″	134° 54 45″	20180110 ～ 20180228 20180908 ～ 20181228	586㎡	農業基盤整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備考
片山遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴建物　２棟 掘立柱建物　７棟 周溝墓　３基 木棺墓　９基	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	
概　要	雁戸井地区ほ場整備事業に伴い、加古台地縁辺部に所在する片山遺跡の発掘調査を実施した。 調査の結果、弥生時代中期後半頃に方形周溝墓と木棺墓からなる墓域が形成され、その後、弥生時代後期後半頃と平安時代後期から鎌倉時代にかけて断続的に営まれた比較的小規模な集落遺跡であることが明らかとなった。				
資料保管機関	〒675-0101　兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7 加古川市教育委員会文化財調査研究センター				

加古川市文化財調査報告　34

片山遺跡発掘調査報告書

令和３（2021）年３月 19 日

編集・発行　加古川市教育委員会
〒 675-0101　兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7
TEL 079-423-4088

印　　刷　三星商事印刷株式会社
〒 604－0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075－256－0961